貝塚市埋蔵文化財調査報告 第66集

# 麻生中下代遺跡発掘調査概要

2004.10.31

貝塚市教育委員会

### はじめに

大阪府南部に位置する貝塚市は、面積43.96km、市域は東西に細長く、南部の山間部は和歌山県に接し、 北部は大阪湾に面しています。北東部は津田川を挟んで岸和田市、南西部は見出川を挟んで泉佐野市、 熊取町に接しています。海浜部の埋め立てや道路建設、住宅開発など都市化がすすむ一方、山間部には 和泉葛城山など豊かな自然が残されています。

麻生中下代遺跡は、本市の内陸部にあたる貝塚市麻生中、半田に広がる遺跡です。本遺跡の東部を熊野詣で賑わった熊野街道(小栗街道)が通っています。本市域における熊野街道沿いには、熊野九十九王子のうちの3つがあり、そのうち貝塚市半田には麻生川王子が設けられていました。また、半田一里塚が所在しており、大阪府内に唯一現存する一里塚です。

昭和初期に貝塚市半田南部の耕地から多数の瓦が表採されたことにより、半田地域に古代寺院が存在する可能性が高くなり、この古代寺院は秦廃寺と推定されています。表採された鬼瓦、軒丸瓦は、貝塚市の文化財として指定しています。

麻生中下代遺跡では、発掘調査において弥生時代から中世に至る数多くの遺構、遺物がその成果として報告されています。

これらの成果は、本市ならびに周辺地域の歴史を明らかにするうえでまことに有意義なことと考えて います。

本書の刊行が、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究 の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位に多大なご協力を頂き、ここに深く感謝の意を表わしますとともに、今後とも本市における文化財保護行政に対する、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

平成16年10月31日 貝塚市教育委員会 教育長 山本太三郎

### 例 言

- 1. 本書は、フジ住宅株式会社の依頼により、大阪府貝塚市半田675 3 他27筆に所在する麻生中下代遺跡において実施した宅地造成に伴う事前発掘調査の概要報告である。
- 2. 調査は、確認調査を平成15年3月24日から平成15年4月4日、本格的発掘調査を平成15年6月9日から平成15年10月10日にかけて実施した。なお内業調査については本書の刊行をもって終了した。
- 3. 調査にあたっては、フジ住宅株式会社より多大なご理解とご協力を得た。記して感謝の意を表す。
- 4. 発掘調査は、貝塚市教育委員会社会教育課、木嶋崇晴が担当した。 現地・内業調査および本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。 岡本恵子、畑中道子、元谷武史
- 5. 本書の執筆・編集は、木嶋崇晴が行った。
- 6. 遺物写真撮影は、木嶋崇晴が行った。
- 7. 出土遺物、調査記録は、貝塚市教育委員会において保管している。
- 8. 本書作成にあたっては、亀島重則氏、藤澤眞依氏のご教示を賜わった。記して感謝の意を表します。

### 凡 例

- 1. 本書で用いた標高は、東京湾平均海水面(T. P.) を基準とした。
- 2. 本書の土色表示は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』1990年度版を用いた。

# 目 次

はじめに 例言・凡例 目次(本文目次、図版目次、挿図目次)

第	【草	Ě	調査に	至る	経過	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	••••••	•••••	•••••	• • • • • • • •	•••••	• • • • • • •	•••••	•••••	•••••	• 1
第2	2 章	至(	立置と	環境	į	•••••	••••••	•••••	•••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	•••••	•••••	••••••	3
第:	章	Ĺ	調査成	果	••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••		4
1.	誹	間査の	の概要	į	• • • • • • • •	•••••	••••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	4
2.	基	は本人	層序	••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		•••••		•••••	•••••	4
3.	柎	出金	貴構	•••••														•
( ]	( )	第	2 遺構	面			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •											
	a	ı. į	調査区	1	•••••	•••••		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		••••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	7
	b	). į	調査区	2	•••••	•••••		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	8
	c	· Ē	調査区	3			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •											0
	d	l. į	調査区	4 •			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •											
	e	e. F	調査区	6			••••••											
	f	. 1	調査区	7			••••••											_
(2	2)	第	1 遺構	面			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •											_
	a	l.	周査区	1			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •											
	b	). Ī	調査区	2			••••••											
	c	. i	調査区	3			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •											
	d	l. F	調査区															
4.	H	土社	貴物	•••			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •											
(1	.)	遺材	<b>菁出土</b>	遺物	,		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •											
(2	?)	遺物	勿包含	層出	土遺物	物 '	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	••••••		•••••	•••••	• • • • • • • •	•••••	•••••	••••••	28
耸 /	幸	£ :	まレム															91

### 插図目次

図1 貝塚市位置図

図2 貝塚市遺跡分布図

図3 調査地位置図

図4 調査区地区割図

図5 調査区2~4 断面模式図

図6 第2遺構面 遺構配置図

図7 竪穴住居跡、調査区1 柱穴P-2130~2132

遺構平・断面図

図8 調査区1・2 遺構平・断面図

図9 調査区2 遺構平・断面図

図10 調査区3 遺構平・断面図

図11 調査区3 柱穴列平・断面図

図12 調査区3 遺構断面図

図13 調査区4・5 遺構平・断面図

図14 調査区6 遺構平・断面図

図15 調査区7 流路断面図

図16 第1遺構面 遺構配置図

図17 遺構出土遺物

図18 遺物包含層等出土遺物

### 図版目次

図版1調査区全景

図版 2 検出遺構

1調査区3 第1遺構面完掘状況

2調査区4 第1遺構面完掘状況

図版3検出遺構

1調香区1・2 第2遺構面完掘状況

2調査区2 第2遺構面完掘状況

図版 4 検出遺構

1調査区3 第2遺構面完掘状況

2調査区3 柱穴列2完掘状況

図版 5 検出遺構

1 竪穴住居跡遺物出土状況

2 竪穴住居跡完掘状況

図版6検出遺構

1竪穴住居跡 土坑 (炉) 断面状况

2 竪穴住居跡 土坑 (炉) 内土器出土状况

図版7出土遺物

3: (SH - 2129) \ 8: (P - 2233) \

10: (SX - 2065),  $16 \cdot 19$ : (SD - 2115),

63: (第4層)、20: (P-2223)、

30: (P - 2048) , 27: (SD - 2040)

図版 8 出土遺物

4 · 5 : (SH - 2129) 、7 : (P - 2131) 、14 :

(P - 2224) 、12: (P - 2232) 、20: (P - 2223)

29: (SD - 2040) 、31: (P - 2030) 、32:

(SK - 2039) 、36: (P - 2203)

図版9出土遺物

11: (SX - 2066) 、21: (SX - 2024) 、24:

(P - 2048) 、26: (SD - 2040) 、35:

(SX - 2204) 、73・80 (撹乱) 、74: (機械

掘削)、78・79: (側溝)、81: (第4層)

# 第1章 調査に至る経過

フジ住宅株式会社より平成14年1月に埋蔵文化財発掘調査届出書が提出された。当該地は、周知の遺跡である 麻生中下代遺跡の範囲にあたり集落跡の存在が予想された。

本遺跡においては、大阪府教育委員会による平成8年度と平成12年度において府営半田住宅の改築工事に伴う 発掘調査により弥生時代~中世の遺構を検出している。

平成8年度の調査、平成12年度の調査においては、弥生時代の竪穴住居跡、飛鳥時代、奈良時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。

これらの調査事例により遺跡の範囲が広がることが想定でき、今回の開発地についても遺跡の存在が予想される地点であった。

開発計画における埋蔵文化財の取扱いについて、工事主体者と貝塚市とで協議を行い、確認調査を行うことで 合意した。

確認調査は、開発による掘削によって埋蔵文化財に影響を及ぼす取付け道路部分、防火水槽設置部分を中心に 計14箇所の調査区を設定し、平成15年3月24日から平成15年4月4日にかけて実施した。

調査の結果、開発地の南西部を中心に遺物包含層を検出した。これらの遺物包含層からは土師器、須恵器が多数出土している。また地山面において柱穴、土坑、溝等の遺構を検出した。開発地の北部及び東部においては地山が削平されており、遺構、遺物は確認できなかった。

開発地の南西部を中心に遺構及び遺物包含層を確認し、さらに北東方向へ遺跡範囲外にも遺物包含層が広がることを確認したため、遺跡発見届出書の提出を求めた。平成15年5月9日に工事主体者から遺跡発見届出書が提出された。

平成15年5月30日、工事主体者との協議の結果、遺跡に影響を及ぼす取付け道路部分において本格的発掘調査を行うことで合意した。発掘調査の期間は、平成15年6月9日から平成15年10月10日である。

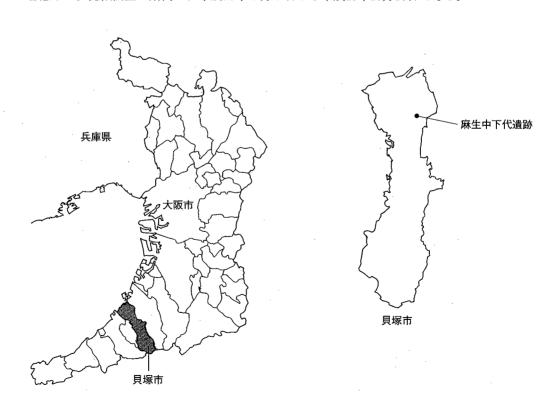
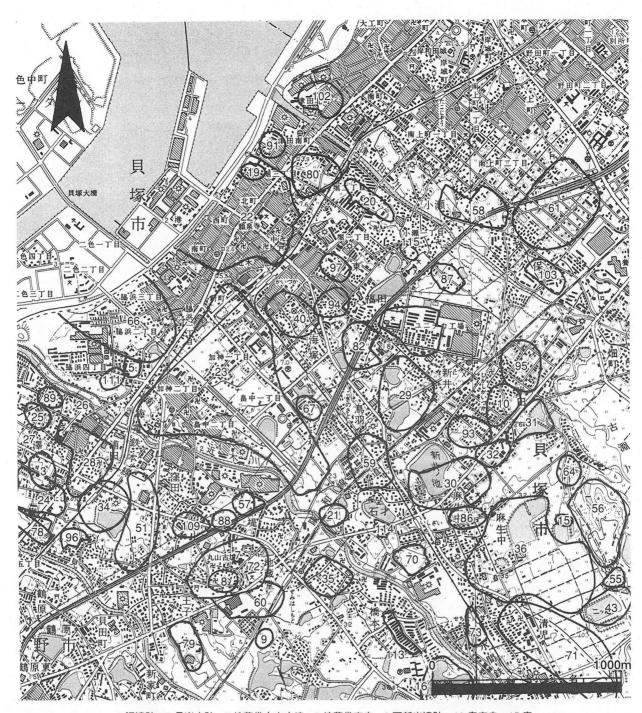


図1 貝塚市位置図



3.沢遺跡 5.長楽寺跡 7.地蔵堂丸山古墳 8.地蔵堂廃寺 9.下新出遺跡 10.秦廃寺 15.麻生中新池遺跡 16.河池遺跡 20.堀遺跡 21.橋本遺跡 22.貝塚寺内町遺跡 23.加治・神前・畠中遺跡 24.明楽寺跡 25.沢共同墓地遺跡 26.沢西出遺跡 27.沢海岸北遺跡 28.沢城跡 29.新井・鳥羽遺跡 30.新井ノ池遺跡 31.半田遺跡 32.麻生中遺跡 34.澱池遺跡 35.積善寺城跡 36.清児遺跡 43.二ツ池遺跡 51.窪田遺跡・窪田廃寺 55.槍ヶ谷城跡 56.半田遺跡 (清児地区) 57.堤遺跡 58.小瀬五所山遺跡 59.石才遺跡 60.王子遺跡 61.土生遺跡 64.海岸寺山遺跡 66.脇浜遺跡 67.今池遺跡 69.三ヶ山西遺跡 70.石才南遺跡 71.名越遺跡 72.地蔵堂遺跡 73.名越西遺跡 75.新井・鳥羽北遺跡 78.沢西遺跡 79.王子西遺跡 80.津田遺跡 82.福田遺跡 86.麻生中出口遺跡 87.小瀬遺跡 88.堤三宅遺跡 89.沢新開遺跡 91.堀新遺跡 93.麻生中下代遺跡 94.堀秋毛遺跡 95.半田北遺跡 96.沢老ノ塚遺跡 97.東遺跡 102.津田北遺跡 103.久保遺跡 109.窪田ハマデ遺跡 110.海塚遺跡 111.脇浜川端遺跡 113.橋本野岸ノ下遺跡 114.麻生中薬師寺堂遺跡 115.谷池遺跡

図2 貝塚市遺跡分布図

# 第2章 位置と環境

麻生中下代遺跡は、近木川右岸、標高22~24mの中位段丘上に位置する。南北約240m、東西約300mの範囲に 広がる、古墳時代、奈良時代~平安時代の集落跡として登録している。

昭和初期に貝塚市半田の耕地より多数の瓦が表採されたことにより、貝塚市半田に古代寺院が存在する可能性が高くなった。この古代寺院は、『広隆寺末寺并別院記』に記された天武天皇八年(679)に秦勝賀佐枝等によって建立されたとされる秦廃寺と推定されている。秦廃寺周辺には飛鳥・奈良時代を中心とする遺跡が所在しており、麻生中下代遺跡も寺院周辺に形成された集落跡と考えられる。

麻生中下代遺跡の調査は、府営半田住宅の改築工事に伴い、平成8年度(1996)、平成12年度(2000)に大阪 府教育委員会によって発掘調査が実施されている。本市による調査においては、中世もしくはそれ以前に形成さ れた溝や奈良時代の遺物包含層を確認している。

周辺の遺跡としては、新井ノ池遺跡、半田遺跡、半田北遺跡、秦廃寺があげられる。

新井ノ池遺跡は、本遺跡の南に位置し、弥生時代から古墳時代、中世にかけての散布地、集落跡と推定される。 これまでの調査により古墳時代まで遡る可能性のある自然流路、平安時代の掘立柱建物跡、中・近世の耕地跡に 伴う鋤溝、溝等を検出している。

半田遺跡は、本遺跡の東に位置し、中世の集落跡と推定される。古代の掘立柱建物跡や溝を、中・近世の耕地跡に伴う鋤溝、溝等を検出している。遺跡範囲内を熊野街道が縦貫しており、古代から中・近世に至る重要な交通路として発展してきた。

半田北遺跡は、本遺跡の北に位置し、奈良時代の掘立柱建物跡等の遺構や遺物を確認している。

秦廃寺は、本遺跡の北接し、周辺の耕地より創建当時の瓦が表採されており、白鳳期の古代寺院の存在が推定されている。古代の柱穴等を検出している。大阪府教育委員会の調査により、秦廃寺の南限と考えられる位置において地山を削り出した土段状の遺構が検出されている。

これら麻生中下代遺跡に隣接する遺跡は、秦寺に関連する集落地等と考えられ、6世紀後半から8世紀にかけての遺物や遺構を確認している。中世には寺域の一画に熊野詣の九十九王子の一つである麻生川王子神社が祀られていたが、明治期の神仏習合政策により阿莫加神社に合祀された。

本遺跡の東に位置する丘陵南斜面を中心に海岸寺山遺跡が所在し、海岸寺山窯跡と海岸寺山古墳を内包している。窯跡は2基確認されており、6世紀後半の須恵器が採集されている。古墳は現在5基確認されており、6世

紀後半の横穴式石室をもつ古墳と推 定されている。秦廃寺の建立氏族と 考えられる秦氏との関連が指摘され ている。

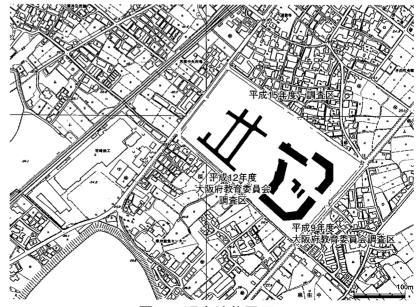


図 3 調査地位置図

# 第3章 調 查 成 果

#### 1. 調査の概要

調査区は建設計画に基づき、南北約125m・東西約135m、面積2,550m2を設定した。調査区は国家座標 $\mathbb{N}$  系基準値X=-173135m、Y=-57645mを基準にして $5m\times 5m$ に区画し、西に30区( $A\sim d$ )を設け、南に25区( $1\sim 25$ )を設けた。便宜上、国家座標を基準とする区画名とは別に、調査区全体を8区画に分け、調査区  $1\sim 8$ と表記する。各調査区の区画は、調査区 1( $W-10\sim Z-13$ )、調査区 2( $N-24\sim b-12$ )、調査区 3( $H-10\sim Q-21$ )、調査区 4( $M-7\sim U-17$ )、調査区 5( $Q-10\sim S-11$ )、調査区 6( $B-11\sim R-3$ )、調査区 7( $1-2\sim L-4$ )、調査区 8( $10\sim 4\sim 6-7$ )である。

#### 2. 基本層序 (図5)

基本層序は、第1層は盛土(層厚05~08m)、第2層は旧耕土(層厚01~02m)、第3層はにぶい黄橙色(10YR6/3) 土混じり黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト(層厚0.1~0.2m)であり、調査区1から調査区5及び調査区6の一部で 検出した。第3層は、調査区2南部においては2層に分けられる。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器等が出土し ている。第4層は灰色(5 Y5/1)粘質土(層厚0.05~0.1m)であり、調査区1から調査区5にかけて検出して いるが、調査区2中央部において第4層は後世の削平を受けている。第4層より弥生土器、土師器、須恵器、瓦 器、陶磁器等が出土している。第3・4層の出土遺物は8世紀前後の遺物がその中心であり、土地開発や耕作に

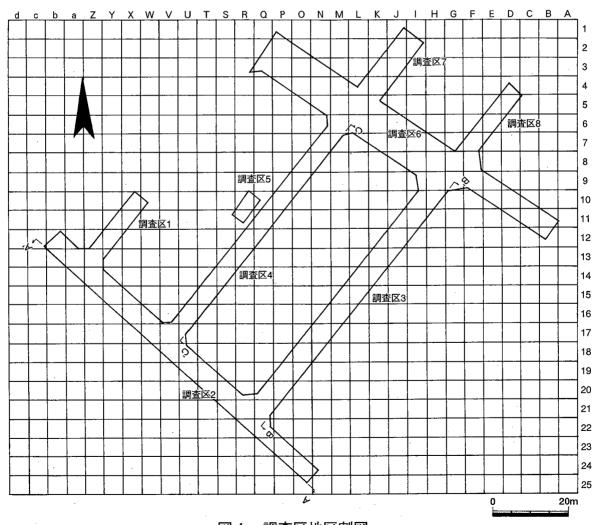
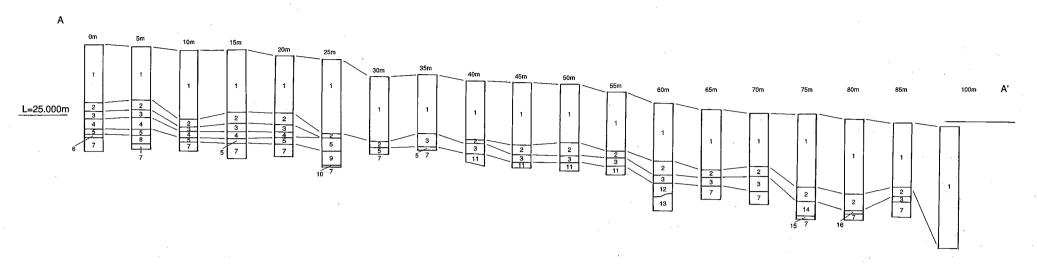
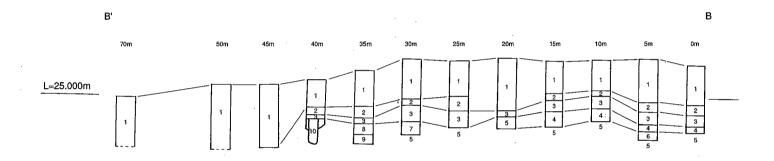


図 4 調査区地区割図





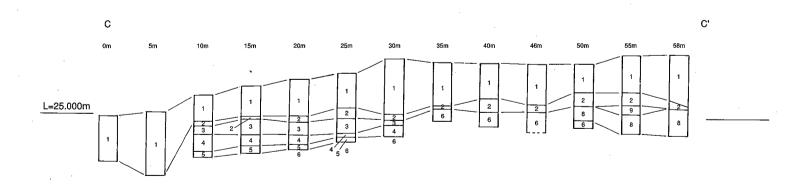


図5 調査区2~4 断面模式図

#### 調査区 2 西壁断面模式図(S=1/40)

- 1:盛土・撹乱層(第1層)
- 2:旧耕土(第2層)
- 3 : にぶい黄橙色(10YR6/3)土混じり黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト(第3層)
- 4:黄灰色(2.5Y6/1)砂質土(第3層)
- 5 : にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土(第 4 層)
- 6:灰色(5Y5/1)粘質土(第4層)
- 7:にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質シルト (地山)
- 8:暗灰黄色(2.5Y5/2)砂混じり粘土(SX 2080)
- 9:褐灰色(10YR6/1)シルト(SD 2095)
- 10:黄灰色(2.5Y5/1)土混じり黄褐色(2.5Y5/3)粘質シルト(SD 2095)
- 11:灰オリーブ色(5 Y5/2)砂礫(自然流路)
- 12:灰色 (5 Y6/1) 粗砂混じり砂 (SD 2115)
- 13:灰色(5 Y4/1)礫混じり粗砂(SD 2115)
- 14:灰白色(2.5Y7/1)砂質シルト(SD 2125)
- 15:褐灰色(10YR6/1)小礫混じりシルト(SD 2125)
- 16:黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト(第3層)
- 17:褐灰色(10YR5/1)シルト(SD 2126)

#### 調査区 3 南壁断面模式図(S=1/40)

- 1:盛土・撹乱層(第1層)
- 2:旧耕土(第2層)
- 3:にぶい黄橙色(10YR6/3)土混じり黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト(第3層)
- 4:灰色(5 Y5/1)粘質土(第4層)
- 5:にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土~砂礫(地山)
- 6:褐灰色(2.5Y4/1)粘質シルト(SK 2007)
- 7:褐灰色(10YR4/1)小礫混じりシルト(遺構)
- 8:褐灰色(10YR5/1)粘質シルト(SX 2048)
- 9:褐灰色(10YR4/1)粘質土(SX 2048)
- 10: 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト

#### 調査区 4 南壁断面模式図(S=1/40)

- 1:盛土・撹乱層(第1層)
- 2:旧耕土(第2層)
- 3 : にぶい黄橙色土(10YR6/3)混じり黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト(第 3 層)
- 4:黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト(第3層)
- 5:にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土(第4層)
- 6:にぶい黄色(2.5Y6/4)粘質シルト(地山)
- 7:黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト(第 3 層)
- 8:灰オリーブ色(5 Y5/2)砂礫(自然流路)

より中世の遺物包含層に混在したものである。第5層は褐灰色(10YR5/1)粘質シルト(層厚0.05m)であり、調査区1と調査区3の西部で検出している。出土遺物量は少なく、土師器、須恵器が出土している。第6層はにぶい黄色(2.5Y6/4)粘質シルト(地山)である。時期については、第3・4層は中世、第5層は古代の遺物包含層と考えられる。

各調査区の地形等については、調査区1と調査区3は、東西方向に設定した調査区であり、部分的に第5層が残存しており、地山面において古墳時代・古代の遺構を多数検出している。調査区2は南北方向に設定した調査区であり、地形は調査区2の南部は高く、緩やかに北東方向へ傾斜している。調査区4は東西方向に設定した調査区であり、中・近世の耕地開発により南から北方向へ段状に削平されていた。この削平により遺物包含層が失われている。また調査区4の東部は、撹乱により遺物包含層は削平されている。調査区5は、防火水槽の設置に伴い設定した調査区であり、調査区4において検出した段状遺構等の削平の影響を受けていないため、遺物包含層(第3・4層)が残存していた。調査区6~8については、土地の削平、撹乱等により遺物包含層は確認できなかったが、調査区6南部の地山面において古代、中世の遺構を検出している。また調査区7・8については、遺物包含層は確認できなかった。調査区2・6の北端部(b・12、P・1~4、O・2・3)、調査区1の東端部(W・X・10)、調査区7・8(D・4・5、E・5)の東端部において深さ約1mの大きく掘り込まれた撹乱を検出した。埋土は緑灰色(10G6/1)粘質土であり、遺物は瓦、レンガのほかライフルの薬莢が出土している。近・現代において貯水施設を設けていたと考えられる。

#### 3. 検出遺構

第4層上面(第1遺構面)と第6層(地山)上面(第2遺構面)において遺構検出を行った。第5層は調査区内においては部分的に残存しており、おそらくは中世段階に土地が削平された可能性が考えられる。そのため、第5層は面的には広がらないため、遺構を検出することはできなかった。

#### (1) 第2遺構面 (図6)

第6層(地山)上面において遺構検出を行い、第2遺構面とした。本遺構面では、古墳時代から中世の複数時期の遺構を検出した。本遺構面からは鋤溝、溝、土坑、柱穴、竪穴住居跡等を検出した。

本遺構面における中世の遺構としては、調査区6北部・南部において鋤溝を、調査区 $1\sim5$ において溝、土坑を検出した。古代の遺構としては、調査区 $1\sim5$ において柱穴、溝等を検出している。古墳時代の遺構としては、調査区 $1\cdot3$ において竪穴住居跡、土坑を検出している。

#### a. 調査区1

#### 柱穴(P-2131・2132) (図7・8)

これらの遺構は、Z-13において検出した東西方向の柱穴列である。柱穴の掘方は長軸0.7m、短軸0.5mの長方形を呈す。柱間は1.8mである。遺物はP-2131より土師器高坏(図17・図版8-7)が出土している。時期は飛鳥時代後半から奈良時代と考えられる。

#### P-2130 (図7・8)

本遺構は、Z - 13において検出した柱穴である。規模は直径約0.6m、深さ0.2mである。埋土は灰黄褐色(10YR5/2) 粘質土である。遺物は出土していない。

#### P-2236 (図8)

本遺構は、Y - 12において検出した柱穴である。規模は直径0.4m、深さは0.25mである。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)土である。遺物は出土していない。

#### 竪穴住居跡SH-2129 (図7・8、図版5・6)

本遺構は、Z-13において検出した竪穴住居跡である。規模は一辺約5 m、深さ0.4mであり、平面形は隅丸方形を呈す。住居跡は、南西部と北西隅において近年の埋設管によって破壊されている。住居内の堆積層は、大きく3層に分けられる。上層は黄灰色(25Y6/1)粘質土、中層は灰黄褐色(10YR5/1)粘質土、下層は褐灰色(10YR4/1)粘質土である。住居南西部の上層において土器がまとまって出土している(土器群1)。土師器(図17・図版8-4)、土師器高坏(図17・図版8-5)、(図17-6)等が出土している。住居が埋没する過程において、その上層部で土器を廃棄したものと考えられる。住居の中層・下層からの遺物の出土量は少ない。

主柱穴は4本で構成されており、主柱穴の北側2基(P-2129-1・2)は、径0.35m~0.4m、深さ0.15m~0.2mである。主柱穴南側2基(P-2129-3・4)は、直径0.2m、深さ0.1mである。

壁溝は、住居の西辺、南辺の一部、東辺の一部、北東隅で検出している。幅0.1m、深さ0.05mである。埋土は 暗灰黄色粘質シルトである。

住居の南辺中央部において炭化物の広がりが認められ、炉と考えられる土坑を検出した。土坑は黒褐色(10YR3/2) 粘質シルトであり、炭化物を含む。その下層は黒褐色粘質シルトに地山のブロック土が混入する。土坑内からは 布留式土器の甕底部(図17・図版 7 - 3)が出土している。炉は、破損した底部を取り除かないまま使用してい たのであろう。

土坑西側に、10cm前後の石が数個まとまって出土している(石群 1)。石には打撃痕や被熱痕は認められない。また住居の北側においても $10\sim20$ cm大の石が5 個まとまって出土している(石群 2)。石の用途については不明である。土坑の南側において土器(土器群 2)がまとまって出土している。中型の鉢(図17-1)、高坏体部(図17-2)が出土している。

土器群や石群は住居底面に接しておらず、底面より0.03m上で出土している。これらの遺物の下面が住居床面になる可能性があるが、住居の土層断面では確認することはできなかった。これらの遺物は、住居廃絶後に持ち込まれたものではなく、廃絶の直前まで使用されていた状態であったと推測する。

住居の中央部において、焼土塊を検出した。土坑の位置からは離れているため、土坑(炉)に伴うものではないと考えられるが、その用途については不明である。

竪穴住居の廃絶時期は、出土遺物より5世紀前半ごろと考えられる。また竪穴住居跡は、P-2130~2132、P-2223、SD-2133と切り合い関係にある。

#### b. 調査区 2

#### P-2219 (図8)

本遺構は、a - 13において検出した柱穴である。規模は直径0.45m、深さ0.2mである。埋土は褐灰色(10YR4/1) 粘質土である。遺物は出土していない。

#### P-2223 (図8)

本遺構は、Y - 14において検出した柱穴である。規模は直径0.3m、深さ0.23mである。埋土は黒褐色(10YR3/1) 粘質土である。本遺構は竪穴住居跡の上層面で検出した柱穴である。遺物は須恵器高台付坏(図17・図版 7 - 20) が出土している。

#### SD-2125 (図8)

本遺構は、 $Z-14\cdot15$ 、a-14において検出した溝である。規模は検出長11m、幅0.5m、深さ0.2mである。埋土は灰白色(10YR7/1)小礫混じり砂である。遺物は出土していない。方向は座標北に対し、西へ50°振る。本遺構とSD-2128は、方向性、埋土が類似することから同一遺構であると考えられ、南東-北西方向に緩やかに蛇行する。SD-2126と重複関係にあり、本遺構が新しい時期のものである。

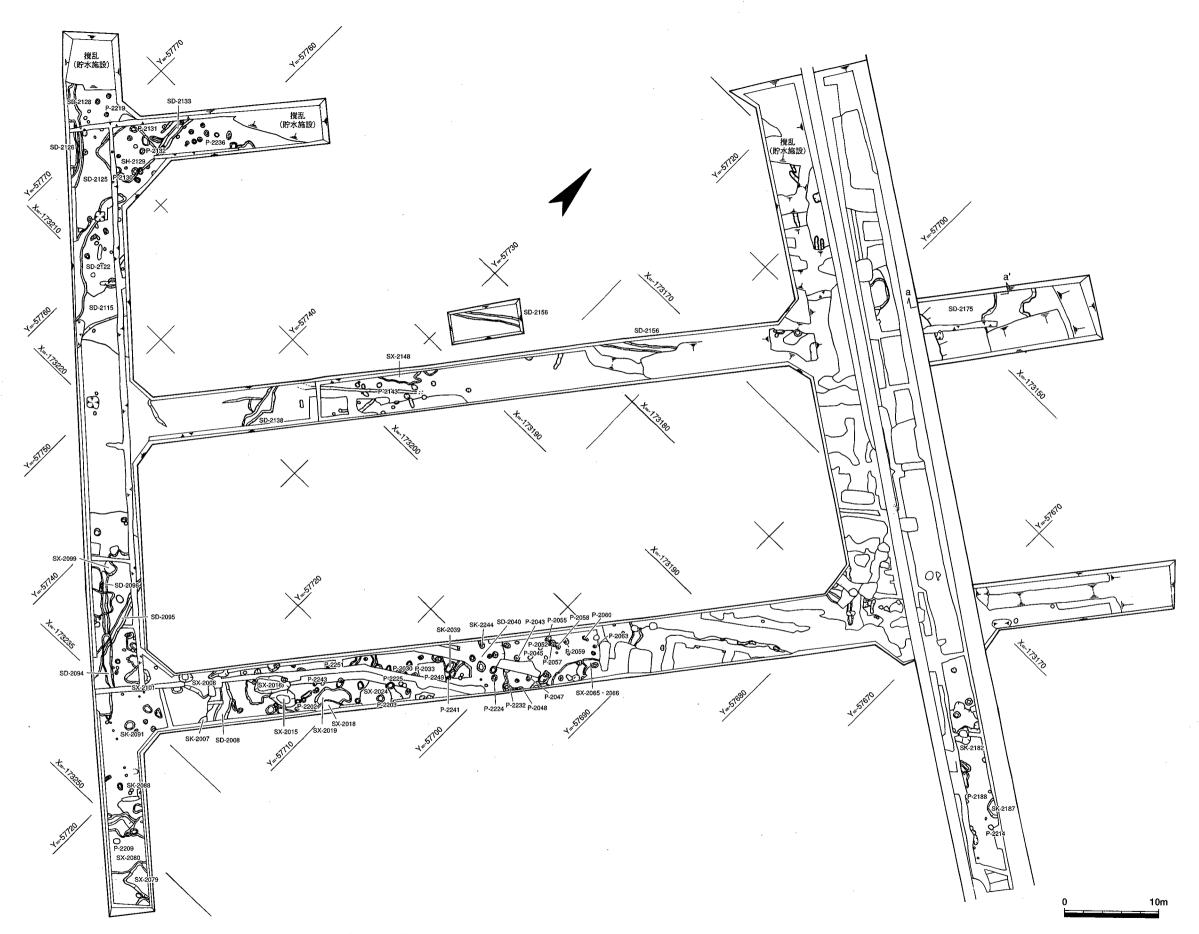


図6 第2遺構面遺構配置図

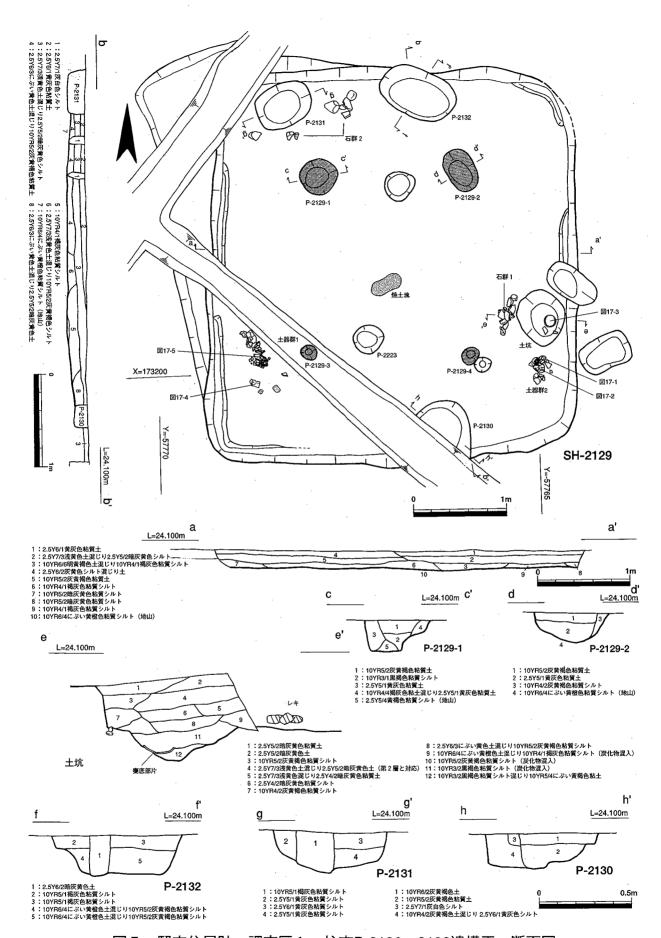


図7 竪穴住居跡、調査区1 柱穴P-2130~2132遺構平・断面図

#### SD-2122 (図8)

本遺構は、Y - 15・16、X - 16において検出した南東 - 北西方向の溝である。規模は検出長14m、幅 1 m、深  $\approx$  0.3mである。埋土は黄灰色((2.5Y5/1))砂に 3 cm未満の磔が混入する。本遺構底部には黒褐色((10YR3/2) 粘土が堆積する。方向は座標北に対し、東へ 5 % 振る。またSD - 2115との切り合い関係により本遺構の方がSD - 2115よりも新しく、8世紀以降に設けられたものである。

#### SD - 2115 (図 8)

本遺構は、W・X・15・16において検出した南北方向の溝である。規模は幅3m、深さ0.25cm、埋土は灰色(5Y4/1) 砂礫混じり粗砂である。遺物は南西部において須恵器が比較的まとまって出土しており、埋没時期は8世紀頃と考えられる。遺物は本遺構南端部で須恵器(図17・図版7・16・19)、(図17・17・18)が出土している。旧河川SD・2114と切り合い関係にあり、本遺構が新しい。本遺構の深さや調査区の断面観察等により後世に削平を受けていると考えられる。またSD・2122と切り合い関係にあり、本遺構の方が古い。

#### SD-2094 (図9、図版3)

本遺構は、 $R \cdot S - 21$ において検出した南東 - 北西方向の溝である。規模は検出長5.5m、幅 $0.5 \sim 1$  m、深さ0.2 mである。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)シルト混じり黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルトである。方向は座標北に対し、西へ45°振る。SD - 2095、SD - 2096と切り合い関係にあり、両遺構よりも新しい時期に設けられた溝である。遺物は出土していない。時期はSD - 2095、SD - 2096との切り合い関係により中世と考えられる。本遺構は、第1遺構面において検出したSD - 107と同方向である。

#### SD-2095 (図9、図版3)

本遺構は、S-20・21において検出した南北方向の溝である。規模は検出長10m、幅0.7m、深さ0.5mである。 埋土は3層に分けられる。上層は褐灰色(10YR6/1)シルト、中層は黄灰色(2.5Y5/1)土混じり黄褐色(2.5Y5/3) 粘質シルト、下層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルトである。方向は座標北に対し、西へ5°振る。水流は南から北へと流れていたと考えられる。溝の断面形状は逆凸形を呈し、断面観察により数回の掘り直しが行われたと推測される。遺物は土師器、須恵器坏片が出土している。本遺構は、SD-2094と切り合い関係にあり、またSD-2133と方向性がほぼ一致する。

#### SD-2096 (図9、図版3)

本遺構は、 $S \cdot T - 20$ において検出した南東 - 北西方向の溝である。規模は検出長 7 m、幅0.5m、深さ0.2mである。埋土は褐灰色(10YR6/1)微砂混じりシルトである。方向は座標北に対し、西へ $45^\circ$  振る。SD - 2094と同方向であり、遺構の切り合い関係によりSD - 2094に先行する溝と考えられる。またSX - 2099と切り合い関係にある。断面観察により掘り直しが行われたと推測される。遺物は須恵器が出土している。時期はSD - 2095と方向が異なること、SD - 2094と同方向であることから中世と考えられる。SX - 2099より 7 世紀前半の須恵器坏が出土している。

#### SX-2101 (図9、図版3)

本遺構は、R - 21において検出した不定形土坑である。規模は検出長1.5m、深さ0.4mである。埋土は上層が 黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルト〜粘質シルト、下層は黒褐色(10YR3/1)粘土ブロック混じり黄灰色(2.5Y4/1) 粘質シルトである。遺物は土師器、須恵器が出土しており、時期は8世紀と考えられる。土坑の性格については 不明である。

#### SK-2091 (図9)

本遺構は、Q-22において検出した土坑である。規模は直径  $1\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.15\mathrm{m}$ である。埋土はにぶい黄褐色( $10\mathrm{YR5/3}$ )土混じり灰黄褐色( $10\mathrm{YR5/2}$ )土である。遺物は出土していない。土坑の性格は不明である。

#### SK-2088 (図9)

本遺構は、P-23において検出した土坑である。規模は直径0.4m、深さ0.05mである。埋土は黒色(10YR2/1)

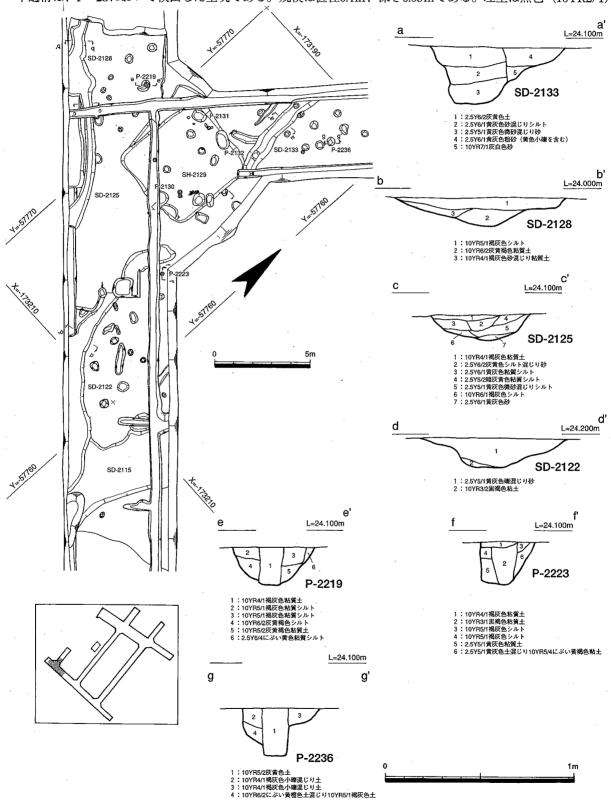


図8 調査区1・2 遺構平・断面図

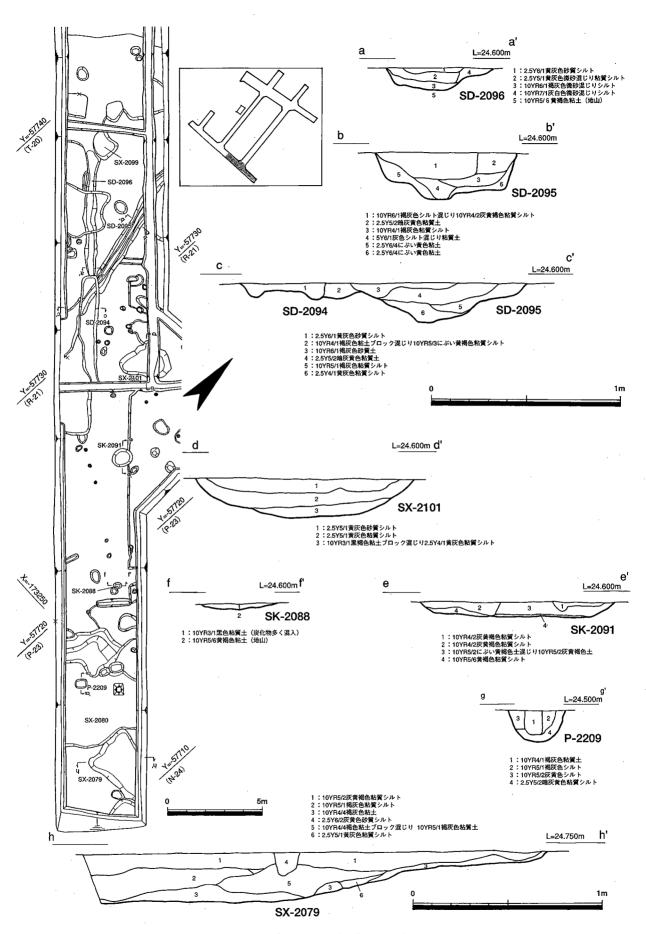


図9 調査区2 遺構平・断面図

粘質土であり、炭化物を大量に含むが、焼土は含まれていない。遺物は出土していない。遺構底部等には火床面は認められない。後世の開発により遺構の上部が削平を受けている可能性がある。炭化物を大量に含む土坑は今回の調査では、この遺構のみであり、屋外のカマド状施設の可能性がある。

#### P-2209 (図9)

本遺構は、P-24において検出した柱穴である。規模は直径0.3m、深さ0.17mである。埋土は褐灰色(10YR4/1) 粘質シルトである。遺物は出土していない。

#### SX-2079 (図9)

本遺構は、O - 24において検出した落込み状遺構である。規模は検出長2m、深さ0.1mである。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルトである。遺構の切り合い関係によりSX - 2080よりも新しい。遺物は須恵器が出土している。埋没時期は7世紀頃と考えられる。

#### c. 調査区3

#### SX - 2065·2066 (図 6)

本遺構は、 $K \cdot L - 15$ において検出した土坑である。規模は南北長 2 m以上、東西長約 3 m、深さ0.1mである。 埋土は褐灰色(10 YR4/1)粘質シルトである。遺物は須恵器坏(図 $17 \cdot$  図版 7 - 10)・(図 $17 \cdot$  図版 9 - 11)が出土している。埋没時期は 7 世紀頃と考えられる。

#### P-2057 (図10)

本遺構は、L-15において検出した柱穴である。規模は直径0.7m、深さ0.2mである。埋土は褐灰色(10YR4/1) 粘質シルトである。遺物は土師器、須恵器が出土している。時期は8世紀頃と考えられる。

#### P-2058 (図10)

本遺構は、L-15において検出した柱穴である。規模は長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.32mである。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/3)土混じり褐灰色(10YR4/1)粘質シルトである。遺物は土師器が出土している。

#### P-2059 (図10)

本遺構は、L - 15において検出した柱穴である。規模は長軸0.55m、短軸0.4m、深さ0.27mである。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルトである。遺物は土師器が出土している。

#### P-2060 (図10)

本遺構は、L-15において検出した柱穴である。規模は直径0.3m、深さ0.15mである。埋土は褐灰色(10YR5/1) 粘質シルトである。遺物は土師器が出土している。時期は8世紀頃と考えられる。

#### P-2063 (図6)

本遺構は、K - 14において検出した柱穴である。規模は直径0.35m、深さ0.15mである。埋土は灰黄褐色(10YR4/2) 粘質土である。遺物は出土していない。P - 2057~2060・2063の時期は、8世紀頃と考えられ、柱穴列3を構成する柱穴の形状と類似する。

#### P-2043 (図10)

本遺構は、M-15において検出した柱穴である。規模は直径0.5m、深さ0.35mである。埋土は黄褐色(2.5Y5/3) 土混じり褐灰色(10YR4/1)粘質土である。遺物は出土していない。

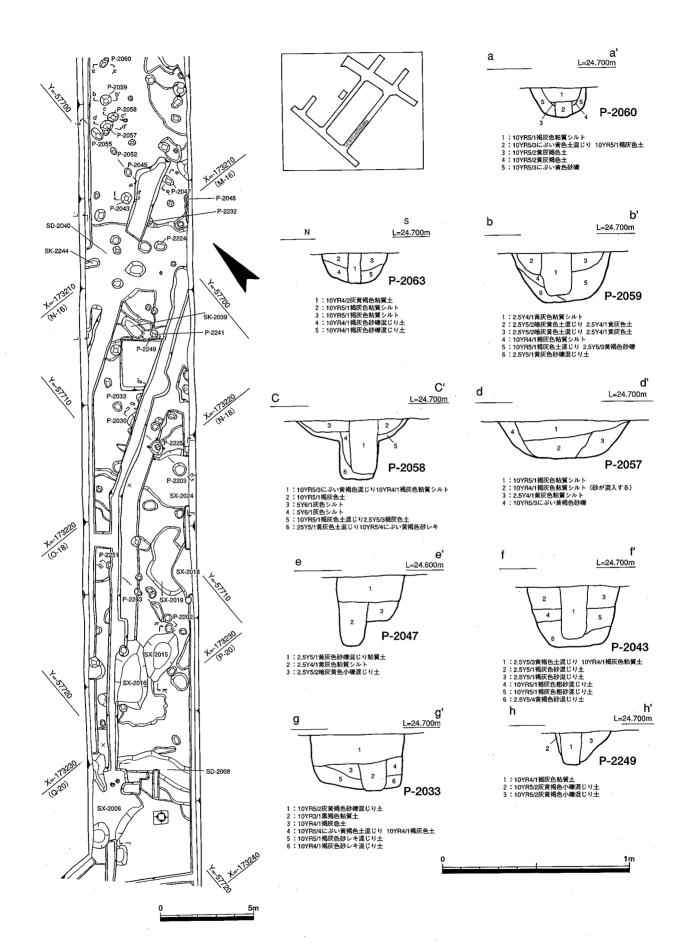


図10 調査区3 遺構平・断面図

#### P-2047 (図10)

本遺構は、L-15において検出した柱穴である。規模は直径0.35m、深さ0.37mである。埋土は黄灰色(2.5Y5/1) 粘質シルトである。遺物は出土していない。

#### P-2033 (図10)

本遺構は、N - 17において検出した柱穴である。規模は直径約0.5m、深さ0.3mである。埋土は黒褐色(10YR3/1) 粘質土である。遺物は出土していない。遺構の 1/2 以上は撹乱を受けている。

#### P-2249 (図10)

本遺構は、M - 16において検出した柱穴である。規模は直径約0.3m、深さ0.18mである。埋土は褐灰色(10YR4/1) 粘質土である。遺物は出土していない。遺構の 1/2 以上は撹乱を受けている。

#### P-2241 (図10)

本遺構は、N-17において検出した柱穴である。規模は直径0.4m、深さ0.1mである。埋土は褐灰色 (10YR4/1) 粘質土である。遺物は須恵器 (図17-34) が出土している。

#### SK - 2039 (図10)

本遺構は、N - 17において検出した土坑である。規模は長軸1.3m、短軸0.5m、深さ0.2mである。埋土は褐灰色(10YR4/1)粘質土である。遺物は土師器甕(図18・図版8 - 32)が出土している。時期は8世紀頃と考えられる。

#### P-2224 (図10)

本遺構は、M-16においてSD-2040の底部より検出した柱穴である。規模は直径0.5m、深さ0.25mである。埋土は褐灰色(10YR4/1)粘質土である。遺物は須恵器蓋(図17・図版8-14)が出土している。

#### P-2232 (図10)

本遺構は、M - 15において検出した柱穴である。規模 は直径02m、深さ025mである。埋土は褐灰色(10YR4/1) 粘質土である。遺物は須恵器坏(図17・図版 8 - 12)が 出土している。

#### P-2048 (図10)

本遺構は、L-16において検出した柱穴である。規模は直径0.3m、深さ0.25mである。埋土は褐灰色(10YR4/1)粘質土である。遺物は須恵器(図17・図版8-24)、土師器甕(図17・図版7-30)が出土している。時期は8世紀頃と考えられる。

#### 柱穴列 (掘立柱建物跡)

掘立柱建物跡を構成していたと考えられる柱穴は、主

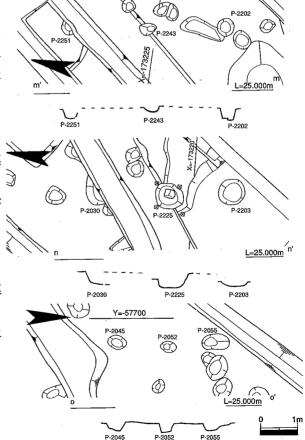


図11 調査区3 柱穴列平・断面図

に調査区  $2 \cdot 4$  において100基以上検出している。とくに調査区 2 の中央部において柱穴が集中していたが、建物の復元には至らず、柱穴列(柱穴列  $1 \sim 3$ )を検出することができた。

#### 柱穴列1(P-2251・2243・2202)(図10・11)

これらの遺構は、O - 18・19において検出した東西方向の柱穴列である。方向は座標北に対し、西へ15°振る。柱穴の掘方は直径0.3~0.5m、平面形状は不定形円形である。埋土は黒褐色粘質シルトである。柱間は1.8mである。遺物はP - 2243より土師器が出土している。

#### 柱穴列 2 (P-2030・2225・2203) (図10・11、図版 4)

これらの遺構は、N-17・18において検出した南北方向の柱穴列である。柱穴の掘方は一辺0.5~0.7mの隅丸方形を呈す。柱間は1.8mである。埋土は黒褐色粘質シルトである。P-2225の底部より20cm大の角石が出土しており、柱を支える根石と考えられる。P-2203は落込み状遺構SX-2024と重複しており遺構底部のみの検出である。遺物はP-2225より土師器、須恵器、P-2030より土師器甕(図17・図版9-31)、P-2203より須恵器(図17-25)・(図版8-36)が出土している。

#### 柱穴列3(P-2045・2052・2055)(図10・11)

これらの遺構は、 $L\cdot M$  - 15において検出した南北方向の柱穴列である。柱穴の掘方は直径0.3~0.4mの円形を呈す。柱間は1.5mである。埋土は褐灰色土である。遺物はP - 2045より土師器、須恵器、P - 2052より土師器が出土している。これらの遺構の時期は出土遺物により8世紀頃と考えられる。柱穴列1・2の柱間1.8mと比して柱穴列3は1.5mと短く、建物も前者に比べ規模が小さくなるため、柱穴列3は柱穴列1・2よりも後出の建物跡と推測される。

#### SD - 2008 (図10)

本遺構は、P-20において検出した溝である。規模は検出長4m、幅1.2m、深さ0.1mである。埋土は褐灰色 (10YR4/1) 粘質土である。遺物は須恵器蓋 (図17-15) が出土している。埋没時期は7世紀頃と考えられる。

#### SK - 2244 (図10)

本遺構は、M - 15においてSD - 2040底部より検出した土坑である。規模は長軸0.8m、短軸0.4m、深さ0.2mである。埋土は褐灰色(10YR4/1)粘質土である。遺物は須恵器(図17 - 13)が出土している。時期は7世紀頃と考えられ、SK - 2244埋没後にSD - 2040が設けられたものと考えられる。

#### SX - 2024 (図10)

本遺構は、N-18において検出した落込み状遺構である。規模は検出長5m、幅2~2.5m、深さ0.3mである。 埋土は黄灰色(2.5Y4/1)砂礫混じりシルトである。出土遺物は8世紀に属する須恵器高台付坏(図17・図版8-21)、須恵器蓋片、土師器坏(図17-35)、土師器甕口縁部片等が出土している。本遺構の底部より柱穴列2を構成するP-2203を検出しており、切り合い関係から柱穴列2よりも新しい時期に設けられたものである。

#### SX - 2006 (図10・12)

本遺構は、Q-20において検出した不定形土坑である。規模は長軸4.8m以上、短軸2.5m以上、深さは0.8mである。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)ブロック土混じり黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルトである。埋土はSX-2016の堆積土に類似する。遺物は土師器が出土している。

#### SX - 2015 (図10·12)

本遺構は、O - 19において検出した不定形土坑である。規模は長軸2.5m、短軸2m、深さ0.3mである。埋土は褐灰色(10YR4/1)小礫混じり粘質シルトである。SX-2016と切り合い関係にある。SX-2016とは異なり、地山であるブロック土等が混入しないことから、人為的に埋没したものではないと推測される。遺物は土師器、須恵器が出土している。

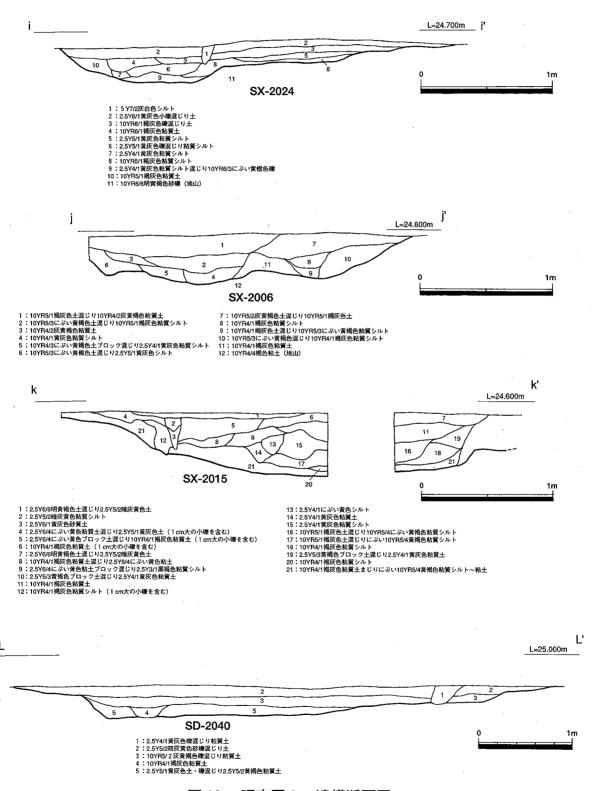


図 12 調査区 3 遺構断面図

#### SD - 2040 (図10・12)

本遺構は、M-15・16において検出した落込み状遺構である。規模は検出長5m、幅約4m、深さ0.6mである。 埋土は黄灰色(2.5Y5/1)土混じり黄褐色(2.5Y5/3)粘質土であり、遺構断面2・3層において砂礫~砂が混入する。本遺構の底部において8基以上の土坑および柱穴を検出しており、掘立柱建物廃絶後に形成された遺構と考えられる。埋土に砂礫~砂が混入することから南東-北西方向の溝の可能性も考えられる。土師器甕(図17-28)・(図17・図版8-29)、須恵器蓋(図17・図版9-26)、須恵質蛸壺(図17・図版7-27)等、8世紀を中心とする遺物が出土している。また二次焼成を受けた土師器甕片が認められる。埋没時期は、土師器羽釜が出土していることから、9~10世紀と考えられる。

#### SX - 2016 (図10)

本遺構は、P-19において検出した不定形土坑である。西側に接するSX-2012とは遺構の断面観察により同一の遺構と考えられる。規模は長軸3.2m、短軸は1 m以上、深さ0.4mである。埋土はにぶい黄色(2.5Y6/4)粘土ブロック混じり黒褐色(2.5Y3/1)粘質シルトであり、遺構断面 $4\cdot5\cdot10\cdot19$ 層では、1 cm大の小礫が多く混入する。遺物は土師器、須恵器(図17-34)が出土している。SX-2015と切り合い関係にあり、時期は本遺構の方が古い。埋土の状況により人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物はP-2012より8世紀に属する須恵器蓋が出土している。

#### SX - 2018 (図10)

本遺構は、O-18・19において検出した不定形土坑である。規模は長軸3.5m、短軸1m、深さ0.2mである。 埋土は灰黄褐色(10YR4/2)粘質土である。遺物は土師器、須恵器が出土している。SX-2019・2022と切り合い関係にあり、本遺構は両遺構よりも時期は新しい。SX-2019より須恵器壺体部、土師器高坏、土師器甕口縁部等が出土している。

#### d. 調査区4・5

#### SD - 2156 (図13)

本遺構は、P-9・10において検出した東西方向の溝である。規模は検出長24m、幅0.6~0.8m、深さ0.2mである。方向は座標北に対し、東へ60°振る。遺物は土師器、須恵器が出土している。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)粗砂混じり土、黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルトである。断面観察により掘り直しが行われている。

#### P-2143 (図13)

本遺構は、S - 13において検出した柱穴である。規模は直径0.45m、深さ0.15mである。埋土は黄褐色(10YR5/6) 土混じり黄灰色(2.5Y6/1)粘質シルトである。遺物は出土していない。

#### SD - 2138 (図13)

本遺構は、 $T-15\cdot16$ において検出した南北方向の溝である。規模は検出長  $6\,\mathrm{m}$ 、幅 $0.5\sim1\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.4\mathrm{m}$ である。埋土は下層が黄灰色(2.5Y5/1)粗砂や礫が混じる砂質土、上層は褐灰色(10YR4/1)砂や礫が混じるシルトである。遺物は小型丸底壺(図17-9)が出土している。 $S-20\cdot21$ で検出した中世の溝と考えられるSD-2095と方向性がほぼ一致するが、出土遺物、埋土等により古墳時代の遺構である可能性がある。

#### SX - 2148 (図13)

本遺構は、R-12、S-13において検出した落込み状遺構である。規模は長軸3m、短軸1m以上、深さは0.5mである。埋土は褐灰色(2.5Y4/1)粗砂混じりシルトである。遺物は須恵器高台付坏(図17-22)、甕の口縁部片が出土している。時期は8世紀頃と考えられる。本遺構は南東-北西方向の溝の可能性があり、SD-2156と方

向性が一致する。SD - 2156より先行する溝であり、後世に削平されたものと考えられる。

#### e. 調査区 6

#### 鋤溝 (図6)

これらは、北部 (N·O-4)、南部 (G~I-9) において検出した鋤溝である。規模は検出長0.5~1.5m、幅

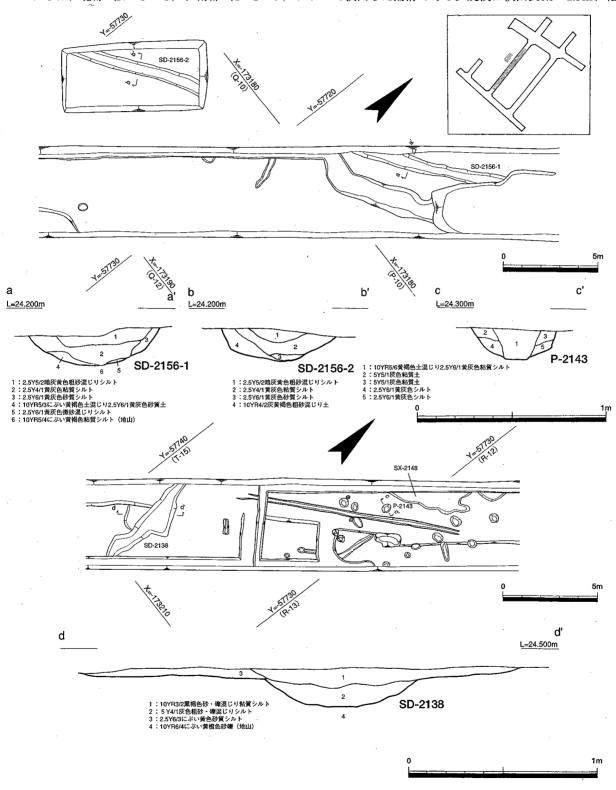
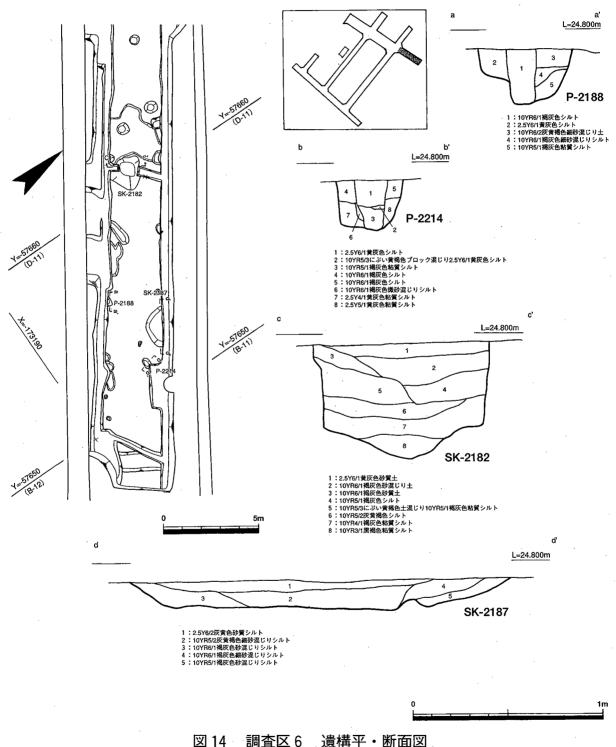


図13 調査区4・5 遺構平・断面図

0.2m、深さ0.03mである。埋土は灰黄色(2.5Y6/2)砂質土である。遺物は出土していない。これらは、地山面 より検出しているが、埋土等の観察により中世の耕地に伴う鋤溝と考えられる。

#### SK - 2182 (図14)

本遺構は、E-9・10、D-10において検出した土坑である。規模は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.6mである。 埋土は3層に大別できる。上層は砂が混入する褐灰色土~砂質土、中層は褐灰色粘質シルト~シルト、下層は黒 褐色粘質シルトである。遺物は須恵器高台付坏片が出土している。埋没時期は出土遺物により7世紀後半から8 世紀頃と考えられる。土坑の性格については不明である。



調査区6 遺構平・断面図

#### SK ~ 2187 (図14)

本遺構は、C-10において検出した土坑である。規模は南北2m、東西1m以上、深さ0.3mである。埋土は灰 黄褐色 (10YR5/2) 細砂混じりシルトである。遺物は須恵器坏、土師器把手片等が出土している。埋没時期は出 土遺物により7世紀後半から8世紀頃と考えられる。

#### P-2188 (図14)

本遺構は、C - 11において検出した柱穴である。規模は直径0.5m、深さ0.3mである。埋土は褐灰色(10YR6/1)シルトである。遺物は出土していない。

#### P-2214 (図14)

本遺構は、C - 11において検出した柱穴である。規模は直径0.35m、深さ0.25mである。埋土は褐灰色(10YR5/1)粘質シルトである。遺物は出土していない。

#### f. 調査区7

#### SD-2175 (図6·15)

本遺構は、K-3・4、L-4において検出した流路である。規模は検出幅約10m、深さ0.4mである。埋土は 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂礫混じり粗砂である。流路は南から北方向へ流れていたと考えられるが、南方向にあたる 調査区 6 では、流路堆積層を確認していないため、東側に大きく蛇行している可能性がある。また埋没時期については遺物が出土していないため、時期は不明であるが、おそらくは人が定住する以前に埋没していたものと推測される。

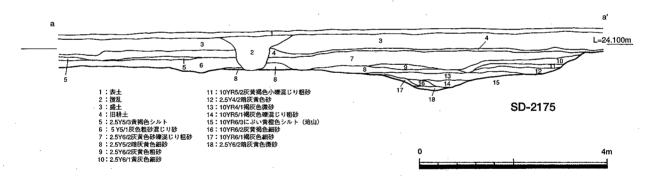


図 15 調査区 7 流路断面図

#### (2) 第1 遺構面 (図16、図版2・3)

第1遺構面は、第4層上面において遺構検出を行い、調査区1~4にかけて鋤溝、溝、段状遺構、落込み状遺構等を検出した。本遺構面は中世~近世にかけての耕地跡と考えられる。

#### g.調査区1

#### 鋤溝 (図16)

本遺構は、 $Y-11\sim13$ 、 $Z-11\cdot12$ において検出した鋤溝である。規模は検出長 $0.8\sim2$  m、幅約0.3m、深さ約 0.02mである。埋土は黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト、暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトの 2 種類に大別できる。遺構の切り合い関係により前者よりも後者の方が時期としては古いと考えられる。前者の方向は座標北に対し、東へ $90^\circ$  振り、後者は東へ $70\sim80^\circ$  振る。遺物は出土していない。

#### SD - 109 (図16)

本遺構は、Y-13、Z-13において検出した溝である。規模は検出長8 m、幅0.6m、深さ0.4mである。埋土は 灰黄色(2.5Y6/2)土混じり黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルトである。方向は座標北に対し、東へ70°振る。方向性 は暗灰黄色砂質シルトの埋土である鋤溝とほぼ平行関係にある。遺物は出土していない。

#### SD - 113 (図16)

本遺構は、 $Z-12\cdot13$ において検出した溝である。規模は検出長3.5m、幅0.4m、深さ0.05mである。埋土は褐灰色(10YR6/1)粘質土である。方向は座標北に対し、西へ10°振る。遺物は出土していない。本遺構はSD-109と切り合い関係にあり、SD-109の方が新しい時期に設けられている。

#### SD-2133 (図6·8)

本遺構は、Y-12・13、Z-13において検出した南北方向の溝である。規模は検出長5 m、幅1 m、深さ0.3 m である。埋土は黄灰色(2.5 Y 5/1)微砂混じり砂である。遺物は出土していない。方向は座標北に対し、東へ5°振る。本遺構は掘り直しが行われている。本遺構は竪穴住居跡(SH-2129)や柱穴と切り合い関係にあり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡よりも新しい時期に設けられたものである。本遺構は第2遺構面において検出している。時期は中世と考えられる。

#### h. 調査区 2

#### 鋤溝 (図16)

本遺構は、南部 (N-24、O-24・25、P-24) と北部 (a-13・14、Y-14・15、Z-14・15) において検出した鋤溝である。規模は検出長 2~4 m、幅約0.3m、深さ約0.02mである。調査区 2 北部の鋤溝の方向は、座標北に対し、西へ45°振るものと西へ120°振るものがある。前者の埋土は、黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルト、後者の埋土は褐灰色 (10YR6/1) 粘質土の 2 種類に大別できる。調査区 2 南部の鋤溝の方向は、座標北に対し、東へ45°振る。埋土は黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルトである。調査区 2 の鋤溝からは遺物は出土していない。

#### SD - 107 (図16)

本遺構は、 $S-20\cdot 21$ 、 $T-19\cdot 20$ において検出した溝である。規模は検出長10m、幅0.4m、深さ0.08mである。埋土は黄灰色(2.5Y5/1)砂質シルトである。遺物は土師器、須恵器が出土している。方向は座標北に対し、西へ45°振る。水流は南から北方向へと流れていたと考えられる。

#### SD - 120 (図16)

本遺構は、R - 20・21、S - 21において検出した溝である。規模は検出長 6 m、幅0.4~0.9m、深さ0.08mである。埋土は灰色(5 Y6/1)砂質シルトである。遺物は出土していない。方向は座標北に対し、東へ45°振る。水流は西から東方向へと流れていたと考えられる。

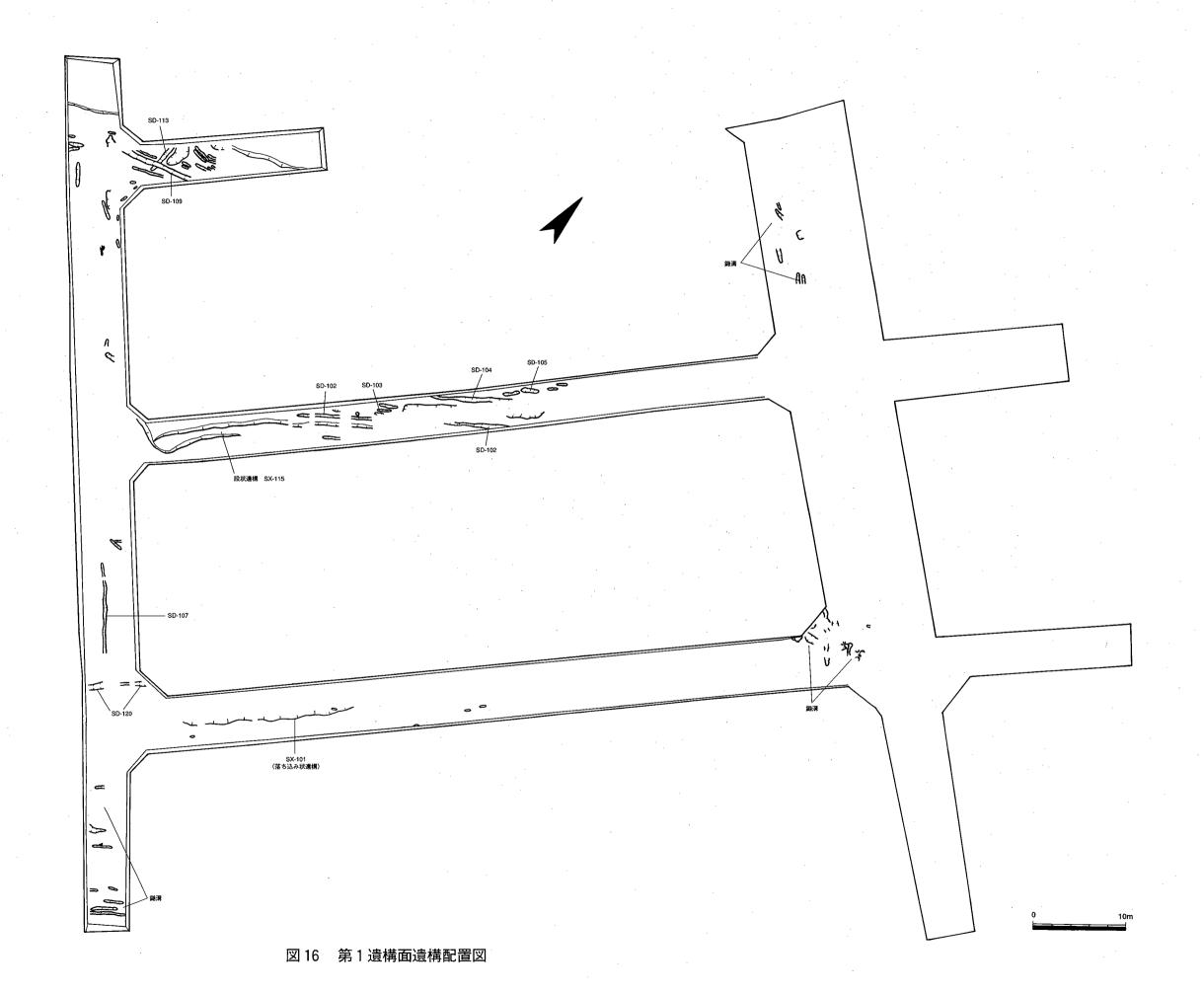
#### i. 調査区3

#### 鋤溝 (図16)

本遺構は、M-16、P-21において検出した鋤溝である。規模は検出長約 1 m、幅約0.3m、深さ約0.02mである。埋土は黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルトである。方向は座標北に対し、東へ60° 振る。遺物は出土していない。

#### SX-101 (図16、図版2)

本遺構は、 $M-16\cdot17$ 、 $N-16\sim18$ 、 $O-18\cdot19$ 、 $P-19\cdot20$ において検出した落込み状遺構である。規模は検出長18m、幅1m、深さ0.15mである。埋土は灰黄色(2.5Y6/2)土である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦、サヌカイト片が出土している。



#### i. 調査区 4

#### 鋤溝 (図16)

本遺構は、 $P-9\sim11$ 、 $Q-10\sim12$ 、 $R-11\sim13$ 、 $S-13\sim15$ において検出した鋤溝である。規模は検出長  $1\sim2$  m、幅約0.3m、深さ約0.02mである。埋土は、にぶい黄橙色(10YR6/4)土混じり黄灰色(2.5Y6/1)シルト と黄灰色(2.5Y6/1)シルトである。方向は座標北に対し、東へ45°振る。SD-103(R-12)、SD-105(Q-10)より土師器、須恵器が出土している。

#### SX - 115 (図16)

本遺構は、R-13、S-13・14、T-13・14、U-15~17、V-17において検出した段状遺構である。規模は検出長25m、幅1~2m、深さ0.15~0.25mである。埋土は黄灰色(2.5Y6/1)砂質土である。本遺構は、地形が南から北へ傾斜しており、耕地として地山を削り出して段状に造成したものと考えられる。本遺構の埋土は、基本層序の第3層よりも砂を多く含むこと、染付け碗片が出土していることから、時期は近世と考えられる。大阪府教育委員会による平成8年度の調査において、中世に造られた段が検出されていることから、今回検出した段状遺構は、中世に開発が行われ、中・近世をつうじて耕地として利用されたものと考えられる。

#### SD - 104 (図16)

本遺構は、Q-11において検出した溝である。規模は検出長0.9m、幅0.3m、深さ0.05mである。埋土はにぶい 黄色(2.5Y6/4)土混じり黄灰色(2.5Y6/1)シルトである。遺物は土師器、須恵器が出土している。

#### SD-102 (図16、図版2)

本遺構は、 $P \cdot Q - 11$ 、 $S - 13 \cdot 14$ 、T - 14において検出した溝である。規模は検出長22m、幅0.3m、深さ0.05mである。埋土は黄灰色(2.5Y6/1)シルトである。遺物は須恵器が出土している。

SD - 102とSD - 104の方向は座標北に対し、東へ55°振り、ほぼ平行しているが、両者の時期差は不明である。 調査区 5 (Q - 8) の第 2 遺構面で検出したSD - 2156もその方向性がほぼ一致する。

#### 4. 出土遺物

#### (1) 遺構出土遺物(図17、図版7~9)

1~6はSH-2129(竪穴住居跡)より出土している。1は鉢であり、外面は二次焼成を受けており、調整等は不明瞭である。2は有稜高坏の体部である。同一個体である口縁部が出土しているが、接合できなかった。口縁部は外上方に長くのびる形態である。3は布留式土器甕の底部である。内・外面とも遺存状態が不良のため、調整は不明瞭である。4は口縁部が外上方に長くのびる小型丸底壺の口頸部である。5は有稜高坏の坏部である。口縁部はやや外反しながら外上方へとのびる。坏部内・外面とも遺存状態が不良のため、調整は不明瞭である。6は高坏の柱部であり、遺存状態は不良である。7はP-2131出土の有稜高坏の坏部である。坏部は直線的に外上方へとのびる。坏部内・外面とも遺存状態が不良のため、調整は不明瞭である。8はP-2233より出土した高坏の柱部であり、遺存状態は不良である。9はSD-2138より出土した小型丸底壺である。内面調整はミガキが施されている。外面調整は不明瞭である。

10はSX - 2065、11はSX - 2066出土の須恵器坏身である。たちあがりは内傾してのび、端部は口縁より突出する。10の底部はヘラ切り後ナデを施し、底部は丸みをもつ。11の底部はヘラ切りの痕跡が残る。

12・13は須恵器坏である。12はP-2232出土であり、体部、口縁部は外方へのびる。13はSK-2244出土であり、体部、口縁部は内弯する。14はP-2224より出土した須恵器蓋であり、天井頂部に宝珠つまみを付す。15はSD-2008出土の須恵器蓋である。口縁部は下外方に下がり、かえり端部は接地し、天井部には凹線をめぐらす。16~19はSD-2115より出土している。16は須恵器坏身であり、体部・口縁部は内弯気味に上外方へのびる。底部はヘラ切りの痕跡が残る。17は須恵器高台付坏であり、高台は外方へ肥厚する。18は須恵器高台付壺底部であり、

体部内・外面はヨコナデを施す。19は須恵器甕の口縁部から肩部である。肩部は下外方へ張り出し、外面は平行叩きののち、カキ目調整、内面は同心円叩きを施す。

20~25は須恵器高台付坏であり、高台は外方へ肥厚する。20はP - 2223、21はSX - 2024、22はSX - 2148、23はSX - 2080、24はSX - 2048より出土している。25はP - 2203出土の須恵器高台付坏であり、体部、口縁部より外方にのびる。

26~29はSD-2040より出土している。26は須恵器蓋であり、天井部はやや丸みをもち、口縁部付近は水平にひらき、端部は下方へ屈曲させる。27は須恵質の釣鐘形の飯蛸壺である。釣手部は粘土を貼り付けた後に棒状の工具を差し込んで貫通させている。体部内面は釣手部側から螺旋状にヘラケズリを施す。28・29は土師器甕であり、肩の張らない体部に外面にハケを施す。28の胎土はやや粗い。29の口縁端部は外方へつまみあげており、体部外面には煤が付着する。

30~32は土師器甕であり、肩の張らない体部に外面にハケを施す。30はP-2048出土であり、口縁端部は内側へ折り曲げている。体部外面に煤が付着する。体部内面はケズリを施す。31はP-2030出土であり、口縁部は外反してのび、内面には粗い横方向のハケを施す。32はSK-2039出土であり、体部外面はハケ、内面はケズリを行い、口縁部内面は横方向のハケを施す。

33はSX - 2016出土の須恵器広口壺口縁部である。口縁端部は外方へ肥厚する。34はP - 2241より出土した須恵器広口壺口縁部である。口縁部は外方に肥厚する。

35はSX - 2024より出土した土師器坏である。内・外面は摩滅しており、調整は不明瞭である。36はP - 2203より出土した須恵器壺口縁部である。(図版 8)

#### (2)遺物包含層等出土遺物(図18、図版7~9)

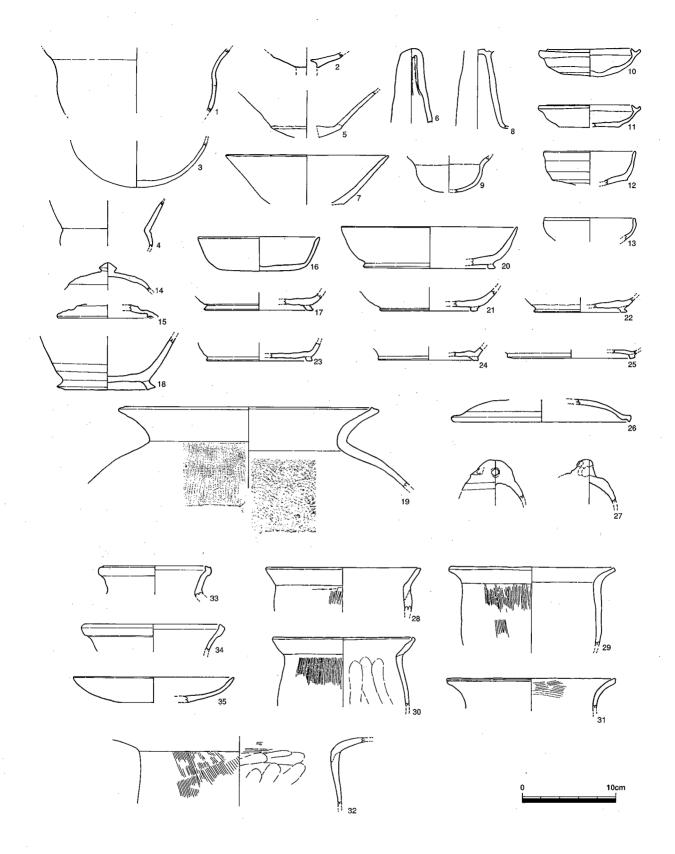
37~39は第5層より出土した須恵器である。37は蓋であり、口縁部は下外方に下がり、かえり端部は接地する。 38・39は須恵器高台付坏である。38の高台は貼付けを行い、高台と坏の接合部分の外面は強いヨコナデで仕上げる。39の高台端面は丸く仕上げる。

40~69は第4層より出土している。40・41は須恵器坏蓋である。頂部には扁平な釦状のつまみが付く。調整は外面がヘラケズリ、内面はナデである。42~50は須恵器高台付坏である。42・45の体部・口縁部は、外上方へのび、端部は丸く仕上げる。42・43の高台は外方に肥厚する。50の高台は外方に肥厚する。

51~55は須恵器台付壺であり、高台はハの字に外傾する端面は丸く仕上げる。53の高台は外に張り出し、高台底部にはヘラ切りによると思われる痕跡がみられる。56は須恵器坏である。体部・口縁部は上外方にのび、口縁端部は丸い。57・58は須恵器無蓋高坏の体部である。内・外面ともに摩滅が著しく、調整は不明瞭である。59は土師器高坏柱部である。60は須恵器甕の口縁部であり、端部は肥厚する。61は須恵器甕の口縁部であり、口縁端部は下方に肥厚する。62・63は土師質の釣鐘形飯蛸壺であり、摩滅が著しい。64・65は土師器甕の口縁部である。口縁部内・外面はナデを施す。64の口縁端部は上方へつまみ上げる。65の口縁端面は凹面を成す。体部内・外面はナデ調整を施す。66は土師器甕である。口縁部は外反させ器厚は厚い。口縁部内・外面はヨコナデ、体部外面は指押さえが残る。67・68は瓦器である。69は青磁碗である。

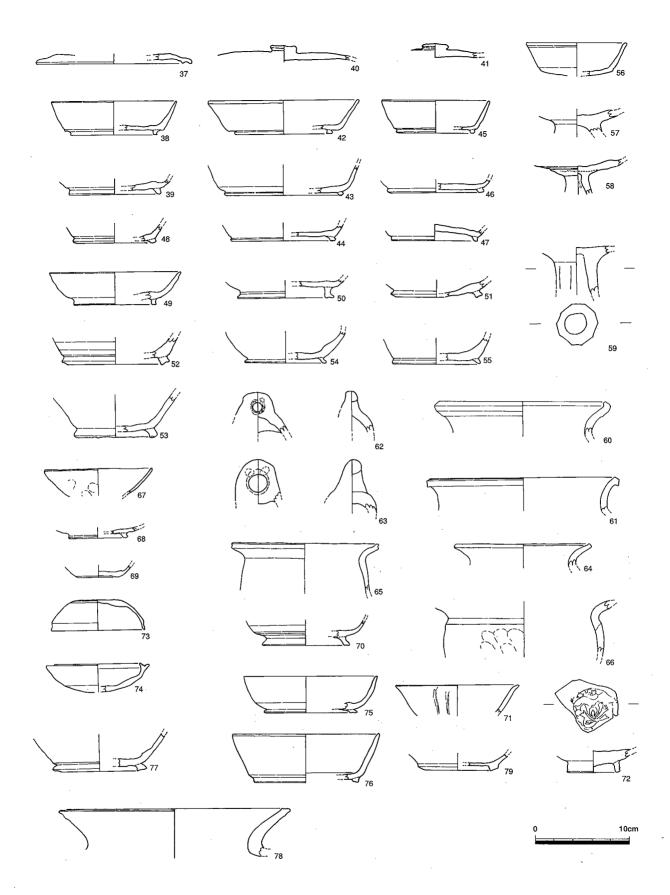
70~72は第3層より出土しており、70は須恵器高台付坏、71・72は青磁である。72は青磁碗の底部である。内面見込に陰刻の華文様を施す。73・76・79は撹乱、74は機械掘削、75・77~79は調査区の側溝より出土している。73~78は須恵器である。73は蓋である。天井部はヘラ切り後、未調整である。口縁部外面には浅い凹線を施す。74は坏身であり、たちあがりは短く内傾する。底部は丸みをもち、ヘラ記号と思われる刻線がみられる。75・76は高台付坏である。75の体部・口縁部は、内弯気味に上外方へのび、外反する。高台は外方に肥厚する。76の体部・口縁部は上外方にのび、端部を丸く仕上げる。77は高台付壺である。78は須恵器甕口縁部である。甕肩部は下外方へ張り出す形態と思われる。口縁部外面には退化した凸線を施す。

79は調査区の側溝より出土した須恵器壺口縁部である。80は撹乱出土の須恵器高台付坏である。81は須恵器壺の頚部であり、外面には波状文を施す。(図版 9)



 $1\sim 6 \text{ (SH-2129)} \ , 7 \text{ (P-2131)} \ , 8 \text{ (P-2233)} \ , 9 \text{ (SD-2138)} \ , 10 \text{ (SX-2065)} \ , 11 \text{ (SX-2066)} \ , 12 \text{ (P-2232)} \ , \\ 13 \text{ (SK-2244)} \ , 14 \text{ (P-2224)} \ , 15 \text{ (SD-2008)} \ , 16\sim 19 \text{ (SD-2115)} \ , 20 \text{ (P-2223)} \ , 21 \text{ (SX-2024)} \ , 22 \text{ (SX-2148)} \ , \\ 23 \text{ (SX-2080)} \ , 24 \text{ (P-2048)} \ , 25 \text{ (P-2203)} \ , 26\sim 29 \text{ (SD-2040)} \ , 30 \text{ (P-2048)} \ , 31 \text{ (P-2030)} \ , 32 \text{ (SK-2039)} \ , \\ 33 \text{ (SX-2016)} \ , 34 \text{ (P-2241)} \ , 35 \text{ (SX-2024)} \ .$ 

図 17 遺構出土遺物



37~39(第 5 層)、40~69(第 4 層)、70~72(第 3 層)、73·76·79(撹乱)、74(機械掘削)、75·77·78(側溝)

図 18 遺物包含層等 出土遺物

# 第4章 まとめ

麻生中下代遺跡の調査では多くの遺構を検出しているが、今回の調査地については、府営住宅等の水道管やガス管等の埋設物により撹乱を受けており、とくに調査地の東側は遺構の残存状況は良くない。今回の調査において検出した主な遺構は古墳時代、飛鳥・奈良時代、中世に属する。

#### 弥牛時代

今回の調査においては、明確な弥生時代の遺構は認められなかった。調査区2の南部と調査区6の南部より弥生時代の土器片等が数点出土している。弥生土器片は中世の遺物包含層から出土している。弥生土器が出土しているこれらの地区は、本調査地の南部にあたり地形的には調査地北部と比較して高所に位置する。弥生時代の遺物包含層が存在していた可能性があり、後世の開発によって削平されたと考えられる。

#### 古墳時代

調査区1において5世紀前半の竪穴住居跡1棟を検出した。本遺跡においては、古墳時代の居住跡は確認されていない。この住居跡は、炉状施設を備えている。竪穴住居跡以外での当該期の遺構としては、調査区4において検出した南北方向の溝SD-2138であり、埋土内より小形鉢が出土している。

古墳時代の遺物包含層は、おそらく後世の開発による削平等を受けたと考えられ、検出できなかったことから、 当該期の集落範囲については不明である。

また調査区 3 において検出した土坑(SX - 2006・2015・2016・2018)は、時期を判断できる遺物は出土していないが、飛鳥・奈良時代以降と考えられる土坑、柱穴等の遺構埋土の様相と比して異なることから、これらの土坑を古墳時代の遺構と判断した。これらの土坑の性格については不明であるが、埋土の状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。

#### 飛鳥時代

調査区 2 南部・調査区 3 において飛鳥時代と考えられる遺構を検出している。当該期の遺構は、調査区 2 南部において、不定形土坑SX - 2079を、調査区 3 においては、南東 - 北西方向の溝SD - 2008、土坑SK - 2244、不定形土坑SX - 2065・2066等を検出している。中世の遺物包含層に混入する当該期の遺物量は、8世紀以降の遺物量と比して非常に少ない。遺構の検出数や遺物の出土量から、本調査地における集落の最盛期が、奈良時代であると推測される。

#### 奈良時代

今回の調査では、掘立柱建物跡を構成していたと考えられる柱穴を調査区  $1\sim6$  において、100基以上検出している。特に調査区 3 の中央部において柱穴が集中していた。建物の復元には至らなかったが、柱穴列(柱穴列 $1\sim3$ )を確認することができた。

これら柱穴や柱穴列は、切り合い関係や府教委の調査成果により数時期にかけて建て替えが行われていたと推測される。検出した柱穴の掘方(平面形状・規模)は3種類に大別でき、それが建物の時期差に反映しているものと考えられる。

調査区 1 で検出した方形掘方の柱穴( $P-2131\cdot 2132$ )は、掘立柱建物跡のなかで古い段階のものであると考えられる。これらの柱穴は、古墳時代の竪穴住居跡と切り合い関係にある。また溝SD-2133と切り合い関係にある柱穴も同一建物を構成していた可能性がある。方形掘方の柱穴は、調査区 1 以外では、調査区 3 の柱穴列( $2030\cdot 2225\cdot 2203$ )が当該期にあたるものと考えられる。

方形掘方の柱穴よりも新しい柱穴は、直径0.3~0.5mの円形掘方の柱穴であると考えられる。埋土は黒褐色土を主体とする。柱穴列ではP-2251・2243・2202である。これら柱穴は調査区1、調査区3の中央部を中心に数多く確認できることから、さらに数時期に細分できる可能性がある。あまり時期差なく建て替えが行われているものと考えられる。

今回の調査で、当該期の新しい段階の柱穴としては、直径0.3~0.4mの円形掘方の柱穴であると考えられる。

埋土は黄褐色土を主体とする。柱穴列では $P-2045\cdot 2052\cdot 2055$ である。これらの柱穴は調査区  $1\sim 6$  にかけて比較的広範囲に散在するが、直径 $0.3\sim 0.5$ mの柱穴と比して検出数、密度に差がみられる。直径 $0.3\sim 0.5$ mの柱穴が調査区 3 を中心に集中的にみられ、複数回の建て替えが行われているのに対し、直径 $0.3\sim 0.4$ mの柱穴は、調査区 3 において切り合い関係が認められるものの、直径 $0.3\sim 0.5$ mの柱穴で構成される建物ほどの建て替えは行われていないと推測される。このことから、掘立柱建物で構成された集落は、ある一定のまとまりをもちながら集落域を拡大してきた。その後、建物は比較的広範囲にわたるものの、建て替えを行う建物も減少し、数棟の小さなグループへと変遷していくものと考えられる。

#### 平安時代から中世

耕地化がすすむのは、平安時代以降である。今回の調査では、基本層序の第5層が当該期の遺物包含層にあたると考えられる。

本調査地における平安時代の遺構としては、調査区3で検出したSX-2040である。この遺構は、北西-南東方向に設けられた溝と考えられる。この溝の底部からは掘立柱建物跡の柱穴と考えられる土坑を検出していることから、これまでの居住地に溝を設けて耕地へと開発が行われたものと考えられる。平安時代以降は居住地から耕地へと土地利用が変化した。

中世の遺構としては、耕地に伴う溝を数条検出しており、溝の方向は3種類に大別できる。北西-南東方向の溝は、調査区2のSD-2096・SD-2094である。南北方向の溝は、調査区2のSD-2095、調査区1のSD-2133、東西方向はSD-2156である。調査区2においては、SD-2094とSD-2095、SD-2094とSD-2096がそれぞれ切り合い関係にあり、SD-2095をSD-2094が切っており、この切り合い関係により南北方向から北西-南東方向へと溝の方向が変化している。さらに第2遺構面で検出したSD-2094・2096の方向は、第1遺構面で検出したSD-107においてもその方向性を継承している。SD-107の位置については、SD-2096の位置よりもやや北東方向に移設されている。調査区1では、南北方向のSD-2133と東西方向のSD-113、SD-109と切り合い関係にあり、南北方向のSD-2133の方が古い。調査区4・5においては、東西方向の溝の位置が変化している。第2遺構面で検出したSD-2156は調査区5において検出しており、第1遺構面で検出したSD-102・104は東西方向をとりつつも、その位置は南へと移設されている。溝の方向性について遺構の切り合い関係から、南北方向をとるものが古い段階に設けられた可能性がある。鋤溝については、各調査区においてその方向が異なることについては、耕地の区画や時期の違いによるものと推測される。

今回の調査では、調査区1で遺構の変遷を示す資料を得ることができた。掘立柱建物跡を構成した柱穴は、竪穴住居跡とSD-2133と切り合い関係にあり、竪穴住居跡→掘立柱建物跡→SD-2133の順に変遷していたことを確認した。過去の調査事例と考え合わせると、5世紀前半には竪穴住居を主体とする集落が形成され、飛鳥時代後半以降は、これまでの竪穴住居から掘立柱建物へと移行し、数時期にわたり建て替えが行われており、集落は飛鳥時代から奈良時代にかけて営まれていたと考えられる。

#### 麻生中下代遺跡の検出遺構の変遷

本遺跡は、府営半田住宅の改築工事に伴い、大阪府教育委員会により平成8年度、平成12年度において発掘調査が行われており、今回の調査成果を含めて整理してみたい。

本遺跡内における居住痕跡は、弥生中期を初現とする。大阪府教育委員会(以下、府教委とする)による平成12年度の調査区において、微高地に立地する竪穴住居跡1棟と土坑、小穴を検出している。時期は出土遺物より弥生中期の中葉~後半(第3様式古・新段階)と考えられている。竪穴住居跡は、直径約8mの円形を呈し、周壁下に幅1.8m、深さ3~10cmの溝がめぐる。住居の中心部には楕円形の炉跡が検出されている。直径約6mの竪穴住居跡はあまり時期差なく直径8mの規模に建て替えられている。

本調査地においては、土器が出土した調査区2・6の南部は、府教委による平成12年度の調査区より続く微高地上にあたるものと推測され、弥生時代の遺物包含層が古代や中世の開発によって削平を受けた可能性がある。

調査区 2 · 6 の南部の地形は北西方向にむかって緩やかに傾斜しており、微高地よりも低い地形(本調査区の北西部)においては、土器の出土量は減少傾向にあり、本調査区では、弥生時代の居住域が存在した可能性は低いと推測される。

#### 古墳時代

府教委の発掘調査における古墳時代の遺構については、須恵器が多数出土した土坑、不定形土坑、溝等が検出されている。居住痕跡等は認められず、本遺跡における古墳時代の活動は低調であったと想定していたが、本調査区北部(調査区1)において5世紀前半の竪穴住居跡を確認することができ、古墳時代の住居群が本遺跡の北西部を中心に形成されていた可能性を示すものとなった。古墳時代の集落は、微高地上に形成されていた弥生中期の集落とは異なり、本調査区の北西部に位置する。集落については、竪穴住居跡1棟のみの検出であり、後世の削平や撹乱により遺物包含層が失われているためか、中世の遺物包含層にも当該期の遺物が混入していないことから、居住域はつかめていない。古墳時代と推定される土坑や溝が数基検出されていることから、小規模な集落が散在的に形成されていた可能性がある。

#### 飛鳥時代

奈良時代

府教委の平成8年度の調査においては、方形竪穴住居9棟、溝、土坑等が検出されている。竪穴住居跡は一辺4.5m~6mの方形を呈し、竃を有する。竪穴住居跡には切り合い関係が認められる。さらに道路に伴う2条の側溝が検出されている。平成12年度の調査においては、竪穴住居跡、土坑、溝が検出されている。竪穴住居跡は4棟検出されており、一辺3.2m~4mの方形を呈し、竃を有するものと無いものが存在する。

本遺跡の南東側においては、住居、土坑などが一定のまとまりをもって分布しており、これらの成果により居住区域の単位を想定されている。住居のまとまりと区画性をもつ溝に注目し、大きく3箇所に分けられている。これらの住居群は3~4棟で構成されたと想定され、数棟の竪穴住居跡で重複関係が確認されている。またこれらの住居には、竈を有するものと無いものが存在することから、住居の機能、役割が異なる可能性が指摘されている。

今回の調査区においては、当該期の竪穴住居跡を確認することはできなかったことから、本遺跡の北西部は当該期の遺構は減少傾向であると判断され、飛鳥期の集落範囲は本調査区域には広がらない可能性がある。また平成8年度の府教委の調査で検出された竪穴住居跡について、瓦質の移動式竈の出土等により秦寺の造営にかかわった工人との関連を指摘されており、これら住居群の範囲は北西に位置する本調査区では検出していないことから、秦寺の推定域の微高地上にその居住域が形成されていたと考えられる。

府教委の調査では、掘立柱建物を16棟以上検出している。これらの建物は、3間×2間を基本とし、桁行方向は東西、南北方向といくつかの方向のものが存在する。柱穴の重複から3回の建て替えが想定されている。柱穴には0.7~1 mの方形掘方のものとより小さい円形掘方のものの2種類、円形の柱穴は時代を経るごとに小型化する傾向にあるという。2条の道路側溝をもつ南北方向の道路が検出されており、この両側に建物は主軸を揃えて建てられていた。さらに東西方向にのびる段が検出されている。この段は地山を削り出して造られており、この南側において瓦溜まりが検出されている。この段は、秦廃寺の寺域の南縁と推測されている。

今回の調査においては、柱穴群を検出したが、掘立柱建物跡を復元するには至らなかった。東西方向と南北方向の柱穴列を確認しており、東西方向と南北方向に主軸をもつ掘立柱建物が存在していた可能性がある。

また今回の調査においては、秦廃寺との関連がある瓦は、数点の出土にとどまり、出土した瓦はいずれも平瓦 片であり、軒丸・平瓦は出土していない。このことから、秦廃寺跡の推定地より約100m西に位置する本調査区 においては、寺院周辺に営まれた集落が広がっていたものと考えられる。

#### 参考

大阪府教育委員会 『秦廃寺跡・麻生中下代遺跡発掘調査概要』 - 府営半田住宅建設に伴う発掘調査 1997.3 大阪府教育委員会 『麻生中下代』 大阪府埋蔵文化財調査報告1999 - 9 2000.3

報告書抄録										
ふりがな	な あそなかしもだいいせきはっくつちょうさがいよう									
書名	麻生中下代遺跡発掘調査概要									
副書名										
巻 次										
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告									
シリーズ番号	第66集									
編著者名	木嶋崇晴									
編集機関貝塚市教育委員会										
所 在 地 〒597-8585 大阪府貝塚市畠中1-17-1 TEL 0724-23-2151										
発行年月日	西暦2004年10月31日									
ふりがな	ふりがな   コード									

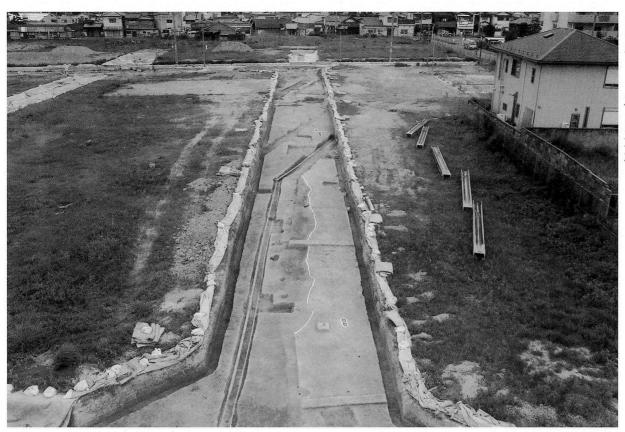
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
7717,2267 [	/// (E 20	市町村	遺跡番号				mi		
あそなかしもだいいせき 麻生中下代遺跡	おおさかふ かいづかし 大阪府貝塚市	27208	93	34度	135度	2003	2,550	宅地造成	
	はんだ	27200	33	26分	23分	0609~1010	l '	-02BB/A	
	半田								
		:							

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
あそなかしもだいいせき 麻生中下代遺跡	集落跡	古墳時代 奈良、平安時代 中世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土抗、溝、鋤溝	サヌカイト片 弥生土器 土恵器 瓦路 陶磁器	

# 図版



調査区全景



1. 調査区3 第1遺構面完掘状況

(南西より)



2. 調査区 4 第1遺構面完掘状況

(東より)



1. 調査区1·2 第2遺構面完掘状況

(北西より)



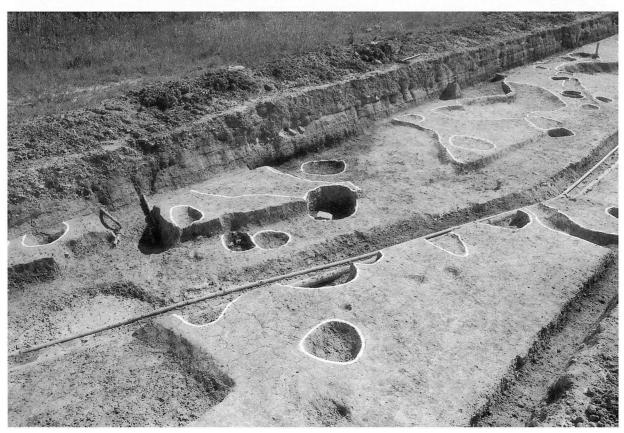
2. 調査区2 第2遺構面完掘状況

(北西より)



1. 調査区3 第2遺構面完掘状況

(東より)



2. 調査区3 柱穴列2完掘状況

(北より)



1. 竪穴住居跡遺物出土状況

(南東より)



2. 竪穴住居跡完掘状況

(北より)



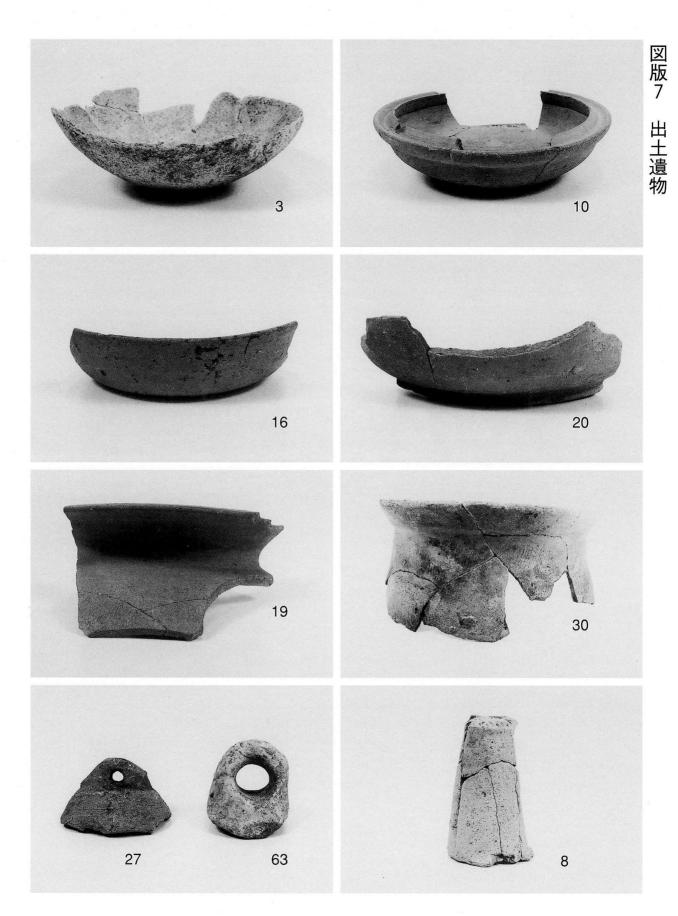
1. 竪穴住居跡 土坑 (炉) 断面状況

(北西より)

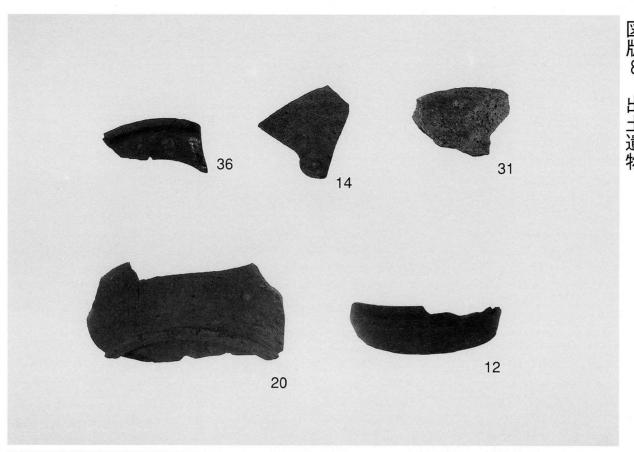


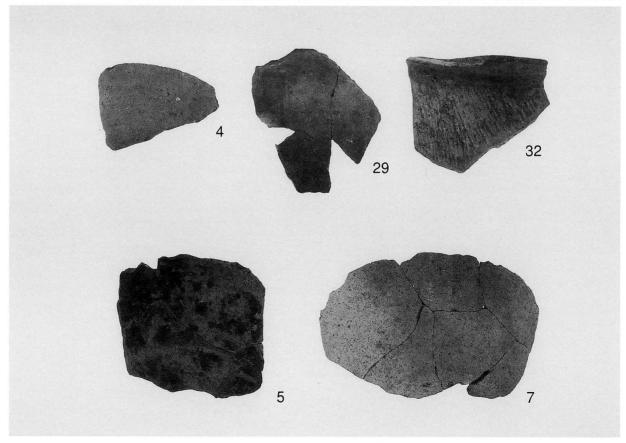
2. 竪穴住居跡 土坑 (炉) 内土器出土状况

(北より)

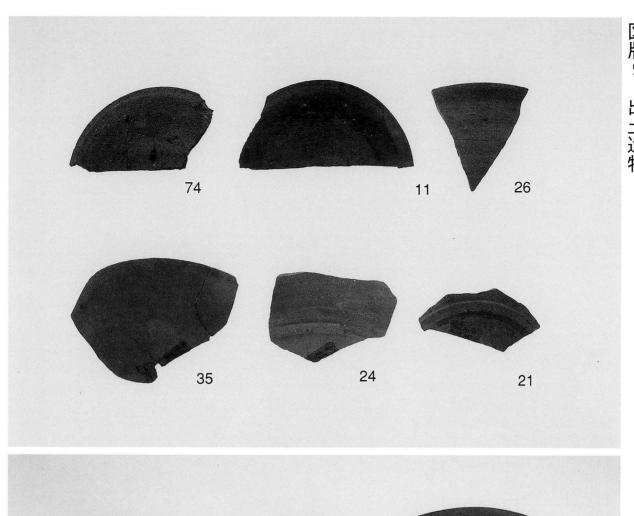


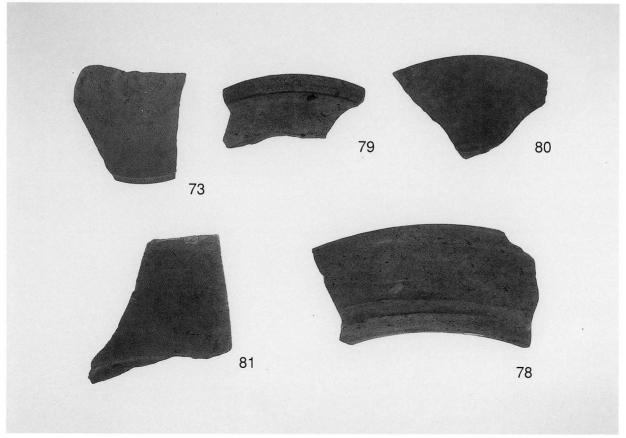
3: (SH - 2129) 、8: (P - 2233) 、10: (SX - 2065) 、16・19: (SD - 2115) 、20: (P-2223) 27: (SD - 2040) 、30: (P - 2048) 、63: (第 4 層)





4 • 5 (SH - 2129) 、7: (P - 2131) 、12: (P - 2232) 、14: (P - 2224) 、20: (P-2223) 29: (SD - 2040) 、31: (P - 2030) 、32: (SK - 2039) 、36: (P - 2203)





11: (SX - 2066) 、21: (SX - 2024) 、24: (P - 2048) 、26: (SD - 2040)

35: (SX - 2204)、73・80 (撹乱)、74: (機械掘削)、78・79: (側溝)、81: (第4層)

## 具塚市埋蔵文化財発掘調査報告 第66集 麻生中下代遺跡発掘調査概要

発 行 日 平成16年(2004) 10月31日

編集・発行 貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号

印 刷 摂河泉文庫

大阪府貝塚市北町20-18